失敗作のユースティティア

優　詩織

あの地域は、ゴミの掃き溜めのようなところだった。
足元には舐め回された空き缶、蝿の集る発泡スチロール製のトレイ。そこかしこに散りばめられた動物の糞尿。
俺は文字通り、そんなクソみたいな環境で、このクソ生意気な少女に出会った。
「なんだ？　やんのか⁉」
深めにかぶられている、全く似合わないミリタリーなワッチ帽、やけに背中が大きくなった白いメンズシャツ。下から伸びる足には生傷が耐えておらず、裸足でもあった。
「可哀想に」
決して同調したわけでもない。否定したわけでもない。なんとなく、四十過ぎたヤニ臭い俺の口からはその言葉が漏れていたのだ。
「はっ……」
その刹那、少女の目がギラリと光る。瞳を真っ二つに割るように、中心に差し掛かっている黒き線。

その目は、犬――否、狐のようだった。

目次

6P　狐の少女

29P　塗り替えられた日常

39P　空間の変化

51P　生きていくこと

63P　慣れ

72P　仲間

86P　危惧

91P　崩壊

98P　閃光

105P　真実

128P　コードネーム

133P　喧嘩しようぜ

139P　野性

失敗作のユースティティア

この物語はフィクションです。
登場人物、事件、団体名等は
全て架空のものです。

第一章　狐の少女

「おい、一ノ瀬！」

会社の喫煙所で味気ないシケモクを吸っていると、同僚である小園が血相を変えて走ってくる。俺がベンチに腰掛けぼうっとしているのをよそに、小園は隣にどっかりと座ってけたたましく唾を飛ばしてきた。

「おい聞けよ！　俺、昇格しちゃった！　聞いてんのか！　俺トーキョー行くんだよ！」

「……」

「やったなぁオイ、人口が少なくなってトーキョーに流れていった奴らにも顔向けできるよな。それにあのトーキョーだぜ、トーキョー。うまい飯もあるわ生きのいい女もうろついてるわで、パラダイス行きが決まったようなもんだろ！」

「……そのお陰で、この地域には人がいないけどな」

「はっ？　いやいやこんなとこ、特にここナゴヤ。ありえねえだろ。夏暑いしちょっと行けばすぐ田舎。想像してみろよ、歩いても歩いてもアスファルトなトーキョー！」

俺もついに、とブツクサ言う小園を置いて俺はシケモクを灰皿に投げ入れた。

「俺はこの地元が好きだけどな」
「えっおい、俺の武勇伝もうちょっと聞けよ！」
「知らん、昇進おめでとう」
背中を向け喫煙所から出ていこうとすると、小園から改めて声をかけられた。
「そういえば、お前のこと長官が呼んでたぞ」
「早く言えや、クソ小園」
小園に小言を吐き、俺はエレベーターの昇を押し社長室に赴いた。

長官室に着くと、かけたまえと労われ、入ってすぐのカウチに座らされた。
秘書がコーヒーを入れてくれ、俺は頭を下げる。
「やあやあ一ノ瀬ヒロ君、来てくれてありがとう」
「いえ。ご用件は？」
長官は立派なひげを撫で下ろしながら、ふたつある、と言って話し出す。

「一ノ瀬君、我々の仕事は公安。街の治安と平和を守ることだ」
「はい」
「昨今、トーキョーでは科学者たちが人体改造……もとい、人と動物をかけ合わせた存在を作ることが秘密裏に行われている」
「……は？」
　素っ頓狂な声を上げた俺とは対称的に、長官は淡々と話す。
「その獣人化改造が成功すればいいものの、失敗する場合もある。奴らはそれを『失敗作』と呼んでいるようだ」
「『失敗作』、ですか。なんとも理不尽な呼び名だ」
「ああ。どうやら、その『失敗作』は適当に田舎に捨てたりしているらしいんだ。寂れすぎて国の管轄から外れている我々ナゴヤ公安の仕事は、そのトーキョーの野郎どもが捨てたものを回収し、街の皆様への危害を最低限抑えること」
「……はあ」
「それを念頭に置きつつ、二つ目」
　長官のブイサインが、やけにしわしわだった。

「君は、ここナゴヤのはずれにあるスラムを知っているか？」
そう言われ、ふと考える。少子高齢化が進んでトーキョー以外何もなくなったこの日本で、田舎はスラムと化した。
「あぁ……知ってます。なんでもホームレスの溜まり場だとか。行き場を無くしたヤクザがいるっていう噂も聞きますね」
「そこにいるらしいんだ。『失敗作』が」
長官の言葉に、俺は心臓が跳ねた。
ナゴヤでも今スラムが問題になっているが、そこに不完全な獣人が住んでいるとなったらまた大問題。
これを放棄している国も国だが、俺は深呼吸して頭を整える。
「なるほど。して、誰が連れ帰るんです？　象と人間のハーフとかだったら、倒せるわけがない」
「そこで君の出番だよ、一ノ瀬君！」
「は？」
今日はやけに無茶ぶりが多い。何なんだ、今日は。

「それこそ君は昔、沢山の指名手配犯を取り押さえ、また捕まえた万引き窃盗空き巣犯は一万を超える。最近はシケモクしか吸ってないが、そんな君にスペシャルでアグレッシブなお仕事ということだ」
「最後暴言入ってませんか？」
「そんなことはないよ。それにその『失敗作』をバディとして迎えれば、ここ最近の君の覇気のなさもどうにかできると思っている」
そう指を刺され、俺はタバコを吸いたい気持ちでいっぱいになった。
「覇気云々は、俺が決めることなので」
長居もしたくないので、俺は席を立ち扉に向かう。
「もう行くのかい？　事前資料とか」
「いりません、とりあえず向かいます」
振り向かずにそう告げると、長官は苦笑したような声をこぼした。
「君のその無鉄砲なところは、変わってないんだけどねぇ」
彼の言葉など聞こえないふりをして、俺は長官室を出た。

鞄に携帯、タバコ、ライター、財布、その他適当なものをまとめて俺はデスクから立ち去ろうとした。
「なーなー一ノ瀬！　何の話だったんだ？」
「まだいたのかよ小園、お前もう家帰ってトーキョーのために荷物まとめろって言われてたんじゃあないのか？」
「いやぁそうだったんだけどよ。離れるとなると妙にさみしくってな。特に最初の同僚、一ノ瀬クンにはぜひ挨拶をしてからナゴヤから離れようと思ったんだ」
「はぁ」
小園は馴れ馴れしく肩を組んでくる。こいつはいつもそうだ。就任式の時だって逐一話しかけてきて、隣のデスクになった時だってペラペラと仕事に関係のないことばかり聞いてくる。
最初こそ上司に小突かれたものの、その上司や俺たちに話しかけてくれていた部下も皆いなくなってしまった。今では部下が三人、上司は長官を含め四人。で、俺と同期の小園を合わせて九人だったのに。
「皆、トーキョーに吸い寄せられていくんだな」

「なんか言ったか？」
俺の小さなつぶやきは小園には届いていなかったようで、なんでもないと首を振った。
こんな至近距離でも聞こえないこいつの耳の悪さと声量のデカさに感謝だ。
「いやーすきま風が吹き閑古鳥が鳴くこの部署を立ち去る時が来るなんてな、俺は悲しいぜ」
「全ッ然悲しそうに見えないんだが」
悲壮感のかけらもない小園の動きに、俺はため息をついた。
「もう行くぞ」
「わ、待てよ」
「なんだ、飯なら奢らんが」
「いや、そうじゃなくってさ」
「んだよ、はっきり言え」
小園の煮え切らない態度にイラつきながら返事をすると、小園は一回二回程度口を開閉した後に、今までで一番大きな声でこう告げた。
「いっ、今まで、ありがとな！」

聞いたこともない声量に聞いたこともないまじめな感謝。
「……は？」
俺が素っ頓狂な顔をしていると、小園はその、あのと言葉を募らせる。
「それこそお前は俺が一人の時黙って隣に座ってくれてたしさ、本当にたまにだけど俺が失敗したときラーメン奢ってくれたり、なんだかんだ話してくれたりさ、えっと、えっと」
「……はあ」
「とにかく、本当にお前には感謝してるんだ。本当に」
「……本当に？」
「本ッ当だ！」
いやにしっかりとした眼差しの小園は、なんだか生まれたての小鹿のようにやわく感じた。
「じゃあ、トーキョーで署長にでもなって、ラーメン奢ってくれよ」
「はッ⁉　お前本当に現金な奴だな」
「感謝してんだろ、それぐらいしろ」

「うっわーいまので感謝失せた、ないわー。本当ありえん」
調子のいい態度に、ああいつもの小園だと思いながら俺が鞄を持つと、肩を組んでくる手が緩む。
「でも、そんなところも良いんだよ。お前は」
うつむいて立つ小園に対して、俺は視線を合わせることなく立ち去ろうとする。
「どーも」
一言、それだけ添えて。
「さあほら、早くいけ。俺もちょっと外出するから」
「えっ！　どこ行くんだ？　俺もついてく！」
「あのなお前……」
トーキョーに出世が決まったのにポンコツな小園に対して、結局俺はいつものように奴を叱ることになるのだった。

車で小園を家まで送って、奴は外に出る。
「ありがとな、送ってくれて」
「おう」
「タバコ臭い車内ももう終わりだと思うと、涙があふれるわ」
「向こうにも俺と同じようなヤニカスがいることを願おう」
「そいつは嫌だな」
談笑もそこそこに、ほらいけと手を挙げてやると、小園は少し寂しそうな表情を見せた。
「じゃあな、一ノ瀬」
「またな、小園」
「……ふふ、ああ。またな」
小園は少し笑って扉を閉める。俺はただ前を向いて、車を走らせた。
感傷に浸っている暇はない。獣人のうわさを確かめるため、スラムに行かなくては。
ルームミラーに映る小園の哀愁漂う姿に少しだけ胸がきゅっとなりながらも、俺は車を走らせた。

「にしても、よりによってスラムか……」

別にスラムが嫌いなわけではない。好きでもないが。

ホームレスが大量に住んでいた場所に失業者や身寄りのない子供などが群がってできたのが、スラム。最初こそ行政は配給や服の支給、仮設住宅の設営などをして手厚くサポートをしていた。

だが人口が少なくなっていくにも関わらずどんどんと増えていく失業者、無駄に増え続け仕事を奪うロボットたち。人手不足なのも災いし行政は徐々にサポートに力を注がなくなり、とうとう十五年前にぱったり行政からのスラム改革の音沙汰はなくなった。

政府はもともと、ことスラムに対しては全く機能していないようなものだし、もうこの国は死骸になっているといっても過言ではない。

「それに混ざって人体改造ときたか」

もう何がしたいのかわからない、行く末が不安だ。

そんなことを考えていてもどうしようもない。俺は赤信号で止まった時、灰皿をのぞき込む。

「これはまだ、吸える」

味のしなくなったガムのように小さな煙草に、もう一度火をつける。新品の煙草も勿論好きだが、こうしてほんのりとしか吸えなくなってしまっているものをもう一度吸うのはもっと好きだ。やめられない。

「おい、横切ってくんじゃねーよ」

割り込んできた車をたたき出すようにクラクションを鳴らし、俺はアクセルを踏む。進んでいくうちに、だんだんと緑が深まっていく。

「右に、左に……あぁよく曲がらされる」

スラムへの道は複雑だ。車が二台通れるほどの道は一応あるものの、山の中というのも相まって車はグラグラ揺れる。

「砂利が年々ひどくなるな……」

スラムに対しての支援がなくなったのは十五年前。本当に徐々に、道の整備も怪しくなっていく。

草木もボーボー、道もぐらぐら。整備もされていない所は、やはり行政の怠慢を感じる。

「よし、着いた」

かろうじて駐車場のような場所を見つけ、車を停めて外に出る。

「うッ……」
停めてすぐに感じたのは、ほんのりと漂う異臭。獣のような、動物臭いような、不快なにおいがする。スラムに今まで一回は来たことはあったものの、ここまでひどかったか。
「酷いな、これは」
そう思いつつ、俺は足を奥へと進めた。

そうして出会った、小汚い獣の少女。
「んだよ、なんとか言えよッ！」
目が鋭く光る。俺の目と少女の目がかち合う。
「ああ、あー、ああ……」
背丈は百五十センチってとこか。髪は長くて赤みがかったピンク、華奢な体。おとなしくしていれば当たり前のように美人な枠になるであろう。だがこの明らかな空手風の

構えが、その雰囲気を台無しにしている。
「オマエ、ここの人間じゃねぇだろ」
「お前こそ、ここの獣……人間じゃねぇだろ」
「な、あ、そうだけど」
「あと、その服装は何だ。やけに長いTシャツ一枚って、彼氏と同棲し始めた女かよ。服装には気を使え」
「あ、あう」
「あとお前、親はどこ行った」
「おや？　親なんて知らねーよ！」
「いやお前には親がいたはずだ……じゃなきゃお前は生まれてこない、お前が生まれ今ここにいるという証明ができないじゃないか……もう一度言うぞ、お前に親はいるのか？　いないのか？」
「い……る！」
　こいつ馬鹿だ。
「じゃあそのお前が今手に持ってるものは何だ？」

「こっ……これは渡さねぇよ！　せっかく捕ってきたパンを、他人に渡すわけにはいかねぇ！」
「違う、俺は今お前が手に持っているものが何なのかを聞いたんだ、渡してほしいなど一言も言っていない。だがお前がそういうのであればお前の頭の中に「こいつになら渡してもいいかもしれない」という気持ちが芽生えているというわけだ。つまりそれは俺のものだ」
「なるほど！　じゃあやるよ！」
やはりこいつ、馬鹿だ。
半分腐ったパンを渡され、俺は思わず眉間にしわが寄る。
「お前、誰に捨てられたんだよ」
ぼそりとつぶやくと、少女の眉間にもしわが寄る。
「あ？」
「知ってるか？　最近、科学者たちが獣と人間を掛け合わせて獣人を作ってやがるらしい。この時点でもうキナ臭いが、どうやら『失敗作』をそこらへんに捨ててるらしくてな」
少女は黙って口をつぐむ。

「俺にとっては正直どうでもいいが、仕事上見捨てるわけにもいかねぇんだよ」
「……」
「それにお前の耳、しっぽ。どう見てもお前、その獣人化計画の渦中の人間だろ？　悪いが、俺の職場まで来てもらいたいんだが」
おい、生きてんのか？　と言いながら、うつむいた顔を覗き込もうとする。
「おい……あいつ、今日は出てきてるらしいぞ……」
すると、少女の後ろのほうからひそひそと声が聞こえる。
「ああ……あの耳、しっぽ、気味が悪い……」
「噛まれたら狂犬病になっちまうぞ」
どうやら失業者達のようだ。あばら家に住んでいて長いのだろうか。失業者というよりホームレス、という言葉が似合う。
「おれ、見つけた時からアイツを殺そうと思ってたんだよなぁ」
「あーわかるぞ、害獣は殺さなくっちゃぁな」
だが俺のこんな考えは、奴らの手にする金属バットによってかき消される。
「おい、やめ……!!」

俺の制止も虚しく、彼女は頭を殴られ、その場に倒れこんでしまう。
「おい、このガキがなにしたっていうんだ！　お前たちに危害なんて加えてないだろ!?」
「うるせーよ、そのスーツ幾らだ？　奪っちまうぞ」
ホームレス共は、俺のスーツをまじまじと見つめてくる。
「こいつは最近ここに住み着いた害獣だ。どこから盗ってきたのか知らんが、いつも食べ物を持っていやがる。それにこいつに噛まれると、発狂して死ぬんだ」
怖いだろう？　と聞くホームレスに、俺はため息をつく。
「その発狂死は実際にあったことなのか？」
「あ？　んなのねーよ。でもこいつが獣人である限り、そうやって噛みついただけで何か起こりそうだろ？」
○○しそう。その言葉が、俺は非常に嫌いだった。
「つまり、根拠のない決めつけってことか」
「根拠ならあるぜ？　この気持ち悪い耳としっぽ、それに牙！　俺的にはこいつの目も気に入らないんだけどよ」
「うるせぇ」

少女の口が流暢に動いたと思うと、彼女は俊敏に動き、ホームレスの一人の腹を思いきり蹴った。
「グ、ふぅあッ!!」
一人は吹っ飛んでいき、近くにあった一級建築士も惚れるようながれきハウスに頭から突っ込んでいく。
「悪いな、アタシのキックは狐の能力を兼ね備えているんだ。そこいらの人間は、余裕で吹っ飛ぶくらいのな」
殴られた頭を手でさすりながら少女は立ち上がる。
「う、でもさすがにあたま、が……」
だが気合も空しく、彼女は長い髪をふらりと揺らして倒れてしまう。
「おい、狐っこ」
俺はそんな少女の顔面に向かって、声をかける。
「……ンだよ、ぃま、死にそぅなんだ、ょ……」
「お前、何がしたい」
その問いに、彼女は一瞬鼻で笑った後、ゆっくり考える。

「ぁ……たし」
荒くなっていく呼吸に乗っていく、願い。
「ぉかさ……に……あいた……」
「……そうか」
こいつの横顔は、あの女に似ている。

『一ノ瀬君は、今日からあたしの下僕だ』

笑った時の八重歯が不細工な、太陽のような笑顔の女。
「悪い、もうしゃべらなくていいぞ」
ああ、うざい。
「は？」

――――――ドン。

「うわあああああああああああああああああああ!!」
銃をもう一人のホームレスに向かって放つと、奴は尻もちをついて倒れる。
「お、おまえ、じゅう、じゅう、銃持ってんのかよッ、ソッ、そう言いやがれや！」
「言ったところで」
ただ足元に打っただけなのに、ビビりすぎなんだよと俺は忠告する。
「こいつは俺の所属する公安で預かる。お前らには関係のないことだろう？」
意識を手放している少女を米俵のように担いで、俺はホームレスを睨む。
「わかったンなら失せろ。不快だ」
そう睨みを利かせると、ホームレスたちは首を垂れながらすたこらと逃げ去っていく。
嵐が去ったのを見届けた後、俺は少女を担ぎ直して車に戻る。
車の助手席に寝かせてやると、少女は少しだけ目を開けた。
「おい。大丈夫か」
俺の問いかけに、少女はゆっくりと頷く。
「お前、名前は」
「そんなの、ない」

そいつは不便だなと考えていると、少女は静かに口を開いた。
「お前、勝手に呼べ」
黙っていれば本当に美少女なのにな、と思いながら、覚醒しつつある彼女に目をそらすように俺は運転席に座った。
「じゃあ狐っこで」
「もっとちゃんとした名前つけろよ」
「じゃあコンちゃん」
「却下」
ペットかよ、と狐っこに指摘される。
「これからどうすんだ？」
狐っこの声に、俺はストレッチとして頭を左右に回しつつ、ため息をついた。
「あー……さぁな」
俺は息をつき、エンジンをかけた。
「ひとまずは、公安に戻るぞ」
シートベルトしろよとぼやきつつ車を動かすと、少女のほうから悲鳴にも似た声が上

がる。
「なあなあなんだこれ⁉　動くのか⁉」
「こいつは車だ」
「アッお前ケムい！　ケムケムしたもん吸うな！　不快だ！」
「これは煙草だ、我慢しろ」
　車内での口論は、公安につくまでずっと終わらなかった。

第二章　塗り替えられた日常

「やあやあ一ノ瀬君！　連れてきてくれてありがとう。ところで、なんでそんなにけがをしているんだい？」
「道中、こいつを丸洗いしたんです」
公安に帰ってまっすぐ長官室に戻ると、長官に顔面のひっかき傷を指摘される。
これはあまりに体を洗っていない狐っこを近くのコインシャワーに寄って、全力で丸洗いした勲章だ。途中こいつが「シャワーの使い方がわからん」と言うからずんずんとシャワー室に入っていったら、顔面をひっかかれた。
「本当にえらい目を見た」
「お前がのぞいてくるからだろ！　エロおやじ！」
「三十以上も下のクソガキに性欲なんて向けるか、エロガキが」
俺はもうすぐ五十だぞというと、やーいジジイと狐っこにいじられイラっとする。
「ところで長官、こいつを保護してどうするんです？」
「あれ、言ってなかったっけ？」

長官は茶目っ気溢れる瞳でこちらを見たかと思うと、誇らしげな顔をしてくる。
「二人には、バディを組んでもらうよーん！」
「は？」
「あとキツネちゃんにはおうちが無いでしょ？　だから一ノ瀬君の家にしばらく居候してもらいまーす！」
「おいおいおいおい聞いてないぜクソ長官」
「そーだぞ！」
俺を押しのけ、狐っこが長官に噛みつく。
「こいつはともかくアタシの気持ちはどーなんだよ！　アタシは悠々自適に暮らしたい！　食べて寝てたい！」
こいつ、母親に会いたいんじゃなかったのか。
「キツネちゃん安心して。ちゃんとお給料は出すし、ふかふかの布団で寝れるよ！」
「えっ、ふかふかの布団……！」
布団だけで食い下がってしまったこの女に対し、俺は思わず頭を抱えた。
「それに、二人だからできることを今から頼みたくてね」

二人だからできること？　と、狐っこは首をかしげた。

「この『失敗作』の子たちは全国に数件確認されているらしい。ナゴヤは過疎っているが、人の多さならまだまだ伸びしろはあるし、なんにせよ日本の中央だからこそ県外に行きやすい。それを見込まれて、トーキョーの人間に頼まれたんだ」

トーキョーの人間がわざわざそんなことを頼む。珍しさに頭が痛くなりそうだ。

「キツネちゃんみたいにバ……素直で明るい子たちばっかりとは限らないけど、キツネちゃんが一ノ瀬君と行動を共にすることによって、その獣人たちも我々を信頼してくれるんじゃないかと思って」

「今こいつのことバカって言いかけましたよね。事実ですのでしっかり言ってください」

「おいッバディなら否定しろよ！」

俺たちの口論に割って入るように、長官は狐っこの頭にそっと手を添える。

「キツネちゃんの存在は貴重なんだ。身寄りのない獣人たちのヒーローになってほしい」

「ひ、ひーろー……」

かっこいいと思われる言葉に露骨につられるのは、バカのやることだ。

「イチノセ！　アタシやるよ！　ヒーロー活動！」

「そうか」
「お前もやるんだよッ！」
その指摘に、俺は今日何度目かのため息をついて頭を抱えた。

その後、職場で事務作業を行っていたが、狐っこは俺たちの仕事や行動に対して逐一質問を飛ばしてきた。
「なぁ、なんだこれ？　しまつしょ？　ひとでもあやめたのか？」
「お前バカのくせになんで殺めるって言葉は知ってんだよ」
他人のデスクに座ったり。
「なんでお前以外だれもいないんだ？」
「来ても仕事が無いからだ」
「じゃあなんでお前はいるんだ？」
「お前の世話しなきゃならねぇからだ」

長官にも変わらず。
「なぁ、なんでここはこんなに広いのに静かなんだ？」
「お前敬語を使え！」
「それはねキツネちゃん、人が死んじゃったからだよー」
「物騒なこと言うな長官！」
とまあ、てんやわんやで大変だった。
どうかそれ以外の出来事は想像していただきたい。思い出しただけで頭が痛くなってくる。
「お前はいつもこの車で帰ってるのか？」
今現在帰るときだって、こんな感じだ。
「そうだ。電車は少ないし人が多くてかなわん、あと煙草が吸えん」
「そのケムケムやめろよー！　長官に聞いたぞ！　体に悪い成分がいーっぱい入ってるって！」
「あのクソ長官……」
やっぱりこいつ、口を閉じれば美人の部類に入る。だがいかんせん動きや言葉などが

ちゃらんぽらんで、この有様だ。
今着ている服と靴も、ほんのり汚れたシャツワンピに木で出来ている硬そうな靴も、こいつの持っている長所を半減、いやもっと減っていく。
「明日は午後出勤だから、朝お前の服買いに行くぞ。もっとましな服着ろ」
「ふく？　服なんてなんでもいーんだけど」
「横に並んで歩く俺の気持ちにもなってくれ……」
ため息交じりにそう呟いているうちに、車は空き家まみれの住宅街に到着する。
「おら、ここが今日からお前の家だ」
俺と同タイミングで車から降りた狐っこは、俺の一軒家を見てほおおおと奇妙な声を上げる。
「スゲー！　でかい！　ひろそう！」
「広いんだ。おいてくぞ」
「あっ、まって！」
玄関を入ってすぐ、狐っこは靴を脱ぎっぱなしで駆け上がっていく。俺は首根っこを掴み、靴を指差した。

「靴揃えるって知らねえのか、お前」
「おじゃまします言わなかったの怒ってるのか？　おじゃまします！」
「違う」
　靴の揃え方を教え、中に入れさせる。
「ここが廊下。走るなよ」
「走るなと言われたら走る」
「次、扉開けたらリビング。奥にキッチンもある。飯は勝手に食うなよ。作ってやるから」
「メシ！」
「リビングについてなんか質問は」
　ないなら次に行くぞと言うと、狐っこは黒い液晶を指差す。
「イチノセ、これなんだ？」
　気になる気になると跳ねて仕方ないので、ソファに乱雑に置かれたリモコンに俺は手を伸ばす。
「これはテレビだ。点ければ色々やってる。バラエティ、ドラマ、映画、ニュース」
「なんだそれ」

「娯楽だよ娯楽。まあまた今度教えてやる」
「ゴラクー？」
「次行くぞー」
　その後も、部屋中全体を案内して回った。
「ここはトイレ。さすがにやり方わかるよな？」
「ダイジョーブだぞ。流せばいいんだよな！」
「……まあ、そうだ」
　その間、こいつは異常に無邪気で。
「なんだこれ！　四角いのがいっぱい！」
「階段だ」
「うわーっ楽しぃ！」
「おい、四足で登るな二足で行け」
　階段を犬のような上がり方で上がっていったり。
「ここはバルコニーだ。太陽が出てるとなかなか日向ぼっこできて気持ちいいぞ」
「日向ぼっこは好きだぞ！　しっぽもふかふかになる！」

「ふかふかのしっぽは触りたいな」
「今度触らせてやるよッ！」
そいつは楽しみだ、と言葉を返して、俺はこいつの部屋へ案内する。
「今日からここがお前の部屋だ」
「ほえ」
無機質で空っぽの、何もない部屋。
白い壁と、木のフローリング。
「すげー！　広い！」
何も家具のない六畳の空間は、部屋内の静けさを引き立てているようだった。
「家具は欲しいのがあったら言えよ。買ってやる」
「わかった！」
らんらんとするまなざしを横目に、俺は別の部屋を案内しようとした。
「なあ、ここもともと何の部屋だったんだ？」
狐っこの質問に、俺の足はぴたりと止まる。
「……」

「おーい？」
狐っこが顔を覗き込んできたが、俺は顔を見られる前に部屋を出て階段を下りる。
「さあな」
「えーっ忘れちゃったのかよ！」
「そういうこった。明日はお前の服買いに行くからな、さっさと飯食って寝るぞ」
「お？　おう！」
俺の心にあいつが不意に現れたのは無視して、俺は部屋を後にした。

第三章　空間の変化

「さてと、飯だ。何食いたい」
「肉！」
飯の希望を聞くと、狐っこは秒速で肉を所望してくる。黙って冷蔵庫を漁るも、一人暮らしの五十歳手前の男の家にがっつり肉があることも予想できないことで。
「肉ねぇや。オムライスでいいか？」
ちょうど賞味期限が明日で切れる卵が四つ。俺は久しく作っていないオムライスを提案した。
「オムライス？」
「卵で包んだやつ」
「たまご」
「まあいい、座って待ってろ」
そこのダイニング、と指示すると、狐っこはキッチンカウンターから見える四人掛けのダイニングテーブルに腰掛ける。

余っている米をケチャップとミックスベジタブルで適当にケチャップライスにして、ぶつ切りにした小さな鶏肉も一緒に入れる。それを別の皿に一回避難させ、卵を割って牛乳を混ぜて溶きほぐす。バターをしいて、ふつふつしてきたフライパンに卵液を流し込む。

「わぁ、すげぇ！」

「座って待ってろって言ったろ、あぶねーぞ」

卵がフライパンと接するときの軽やかな音に、狐っこがつられて寄ってくる。だがフライパンの下で揺らめく炎に、狐っこはびくっと肩を揺らしてしまう。

「わ、火！」

ビビったのであろう。素早くダイニングの向こうにあるソファの下に隠れ、ふるふると震えてしまう。

「こあい」

「安心しろ、死なねーよ」

この程度の火ならな。そう俺はぼやきながら、卵液をひっくり返して、ふわふわの状態でチキンライスの上に乗せてやる。

「できたぞ」
同じ工程を繰り返し二つ完成させ、狐っこの前にさしだす。
「きれい……」
「これをかけて食うんだ。ケチャップっていうんだけど」
トマトケチャップを渡すと、狐っこはきらきらした目で卵にケチャップをかけていく。ぐるぐる巻きのうずまきみたいなのを書いて、狐っこは誇らしげな顔をする。
「かけたぞ！」
「よし。食うか」
俺は適当にストライプ柄を書いて、椅子に座る。
「いただくます！」
「いただきます、だ」
卵につぷりとスプーンをさして、ケチャップと混ぜる。そして米と一緒に口にほおばると、ケチャップの香りが、くぷりと広がる。
我ながら自分の腕に舌鼓をうっていると、狐っこはほっぺを両手で抑えて私腹を味わっているようだった。

「うまいか？」
「んまい！」
「そーか、たんと食え」
口いっぱいにオムライスをほおばる狐っこに、俺の機嫌も良くなる。
「あたひ、ふぉんなうめぇめしくったことぬぇえよ」
「そうかそうか、何言ってるかわからんが食え食え」
「ん！」
るんるんでもう一回スプーンですくって、もぐもぐと咀嚼する。そういえばこいつ、育ちがアレなのはもうわかりきったことだが、食事の作法は無駄にきれいだな。
「ふぁんだよ」
そんなことを思っていると、俺の視線に気づいたのか、狐っこが怪訝そうにこちらを見てくる。
「いや、うまそうだな、と」
「ん、実際うまいからな」
「あとお前、飯食うのはきれいなんだな」

そう指摘すると、これかぁと言いながら狐っこは己の手をまじまじと見つめる。
「んーなんかな。何故かしらご飯はきれいに食べれるんだよ。食べ方を知ってる、っていうか」
「そうか」
なんでなんだろと言いながら食べるスプーンの動きに、俺の脳裏でほんのりと映像が再生される。

『一ノ瀬君！　これ、めっちゃくちゃにおいしいぞ！』
皿のキワに残されたチキンライスの米の一粒まで器用に食べる女。
ガサツなあいつを、どうしても、ぼんやりとしか思い出せない。
『わかってますから、さっさと食ってください』
『はぁーい』
伸びたような間抜けな声も、好きだった。

「おい、イチノセッ！」
狐っこの声で、俺は現代に意識を戻させられる。
「どーしたんだ？　びょーきか？」
「……いや、なんでもねぇ」
俺は少し頭をゆらし、食事を再開した。慣れたオムライスの味は、なんだか味気ない感じがした。
「おかわり！」
それでも、満天の笑顔を見ると、なんだかどうでもよくなる。
「もう一回作らなきゃいけねぇじゃねえか」
「ごはんは美味しいのがイチバンだからなッ！」
「違いない」
同意しつつ、俺はキッチンに立って、食に忠実な狐のためにもう一度腕を振るった。

そして、朝。

七時、俺は起床し、寝間着からスーツに身を包む。
毎朝のルーティンだが、今日からはこれに狐っこを起こすという任務がある。
「おい、朝だ。起き……」
どうせ起きていないだろうと思いつつ扉を開けると、狐っこはもう布団を畳んできりりとした表情でこっちを見ていた。
「いい朝だなッ！　布団もふかふかだったぞ！」
「お前……朝早いのな」
あまりに早起きが似合わないので、俺は言葉をなくしてしまう。
「狐は夜行性なんだ。でもアタシは朝が早くって、なんか早く起きちゃうんだ」
「確かにお前、飯食った後やけに眠そうだったな」
「んーなんかなー、夜七時超えると眠くなっちゃうんだよー」
昨日、オムライスを食べて風呂に入り終わった、直後のこと。
狐っこはうとうととまどろみ始めて、とうとうバラエティー番組を垂れ流しながらソファで横になって転がり始める。適当に貸したボロいダボダボ黒パーカーが、こいつの寝間着だ。

「おい、狐っこ、ここで寝るな」
爪を切っていた俺はその挙動に気づき、狐っこの肩をゆする。
「んー、ねる」
「寝るなら上に行ってくれ」
「てんごく？」
「違う、死ねというわけではない」
とにかくここで寝られたら確実に風邪をひく。俺は狐っこをたたき起こし、狐ルームへと連れていく。
「布団は敷いた。明日からは自分で敷け……」
俺が言いかけたのもつかの間、狐っこは布団を見つけた途端に機敏な動きで中へ入っていった。
「んふー、ぬくぬく」
ほっこりと幸せそうな狐っこに俺はため息をつき、やれやれと言葉を漏らした。
「眠いんなら下で寝るなよ、風邪ひくから。眠くなりそうだったら上へ行くこと、って聞いてんのかこいつ」

俺が話しているのも聞かず、狐っこは眠ってしまった。規則正しい呼吸音だけが、室内に響き渡る。

「おやすみ」

すぅ、すぅと小さな寝息に、俺は少しだけ安心したのだった。

「お前、寝つきと寝起きは良いんだな」

「ふふん、寝て起きて三秒で行動できるぞッ」

「それはいいこった」

そんな話をしていると、狐っこが困ったような顔をする。

「なー、あたし今日は何を着ていればいいんだ？」

「……あ」

布団をクローゼットの中に戻す手が止まってしまう。困惑し、俺は申し訳なく声を絞り出した。

「まあ今日買うまでは、昨日までの服で我慢しててくれ……」

「んーわかった！」

俺の気持ちとは裏腹に元気そうな狐っこに少しホッとしつつ、俺と狐っこは下に向か

い朝食の準備をする。
「いつも何食ってんだ？」
「ヨーグルトとか適当にトースト焼いて、ってくらいだな」
「よーぐると？」
どうやらこいつはヨーグルトを知らないようだ。この世にヨーグルトを知らん奴なんているのか。
「知らないのか、ヨーグルト」
「それ、うまいのか！」
「うまいぞ。座って待ってろ」
「いや、今日は見てる！」
誇らしげな顔で隣で眺めてくる狐っこに、俺はため息をつく。
「まあ、好きにしたらいい」
「おう！」
手は出さないぞと笑いながら、狐っこは隣で待ち遠しそうに俺の調理工程を眺め始めた。

まずヨーグルト、俺はいつも特大サイズのものを買ってそれを器に掬っている。時間がないときは無糖でも躊躇なく食うが、今日はこいつがいるし砂糖を入れよう。

二人分のヨーグルトを一つずつ容器に移し、砂糖をかける。狐っこのヨーグルトには特別にはちみつもかけてやると、目を輝かせた。

「んだこれ！　きらきらしてる！」

「はちみつだ」

「はち？　虫のはちか？」

「そうだぞ」

「うえーっ！　あいつらからこんな美味そうなやつが取れるのかよ！」

「蜂蜜は蜂を潰してるわけじゃない。蜂が集めた花の蜜を凝縮させた、といえばわかりやすいか」

「ほぉ」

「わかるか？」

「よくわかんね！」

そして同時進行でトーストにバターを塗って焼く。トースターからいいにおいが漂い

始め、こんがり焼けたところでトーストが焼き上がりの主張を始める。
ヨーグルトとトーストをテーブルに並べると、狐っこはスプーンをフォークを持ってきてくれる。フォークは必要なかったが、俺は一応ありがとうと頷いてやる。
「いただきます」
昨日の訂正を思い出したかのように、狐っこはスプーンを持つ手を放して、両手を合わせる。
「いただきます！」
「そうだ」
頷いて、俺も食事を始める。
もぐもぐと食事を進めていき、二人であっという間に皿を平らげてしまう。久しぶりにこんなに大量の朝食を取ってしまったので、少し胃が心配だ。
「歯磨いたら行くぞ。服買いに」
歯磨きをするよう促すと、狐っこは満面の笑みで頷く。
「おう！」
俺の質素な日常は、これから徐々に塗り替えられそうな予感がした。

第四話　生きていくこと

二人で家を出て車に乗り、コインパーキングに車を停めて、シャッター街になりつつある繁華街を二人で歩く。
「ひとまず服だ。なんかピンときたとこに適当に行け」
「わかった！」
元気な返事をして、狐っこは駆け出していく。そして見つけた若者向けの店に走っていき、服を選ぶ。
「うわーッかわいいな！　これもかわいいし、これも！　なんだこのフリフリ？」
「レースだな。そしてそれはやめろ、中世のお嬢様みてぇでなんか違う」
いわゆるロリータファッション、ゴスロリ系に興味を示す狐っこに、
「これにするよッ！」
「お、どれどれ」
「まってくれ！　着てみる！」
あわただしく試着室に入っていく姿に、俺はふっと笑みをこぼしてしまう。どったん

ばったんと騒々しい音が聞こえた後、シャッとカーテンが開く。
「どうだ？」
ドヤ顔でそこに仁王立ちする狐っこは、より小ぎれいになったというか。ノースリーブの白いワンピース。
なんだか、懐かしい光景を見ているみたいで。
「おい！　イチノセ！」
「あっ、ああ」
声をかけられ、俺はハッとする。
そうして改めて狐っこをまじまじ見つめ、まあと一言呟く。
「……いいんじゃないか」
「そーだろ？」
狐っこは誇らしそうに、その場でくるっとターンする。
「というかお前、さっきまで白色着てたくせに、また白か」
「いいだろ！　なんか白いのが安心するんだよ」
「成程、それはいいな。でも、これもかぶれ」

俺は店にあった腰ぐらいまであるローブを、頭からずぼっと狐っこにかぶせてやる。
「これは？」
もさもさになった髪をいじりながら、狐っこはローブをそっと撫でる。
「フードだよ。人がいないからと言って、獣人見たら普通の人は驚くだろ。俺はもう慣れたがな」
「イチノセすごいな！」
嬉しそうに笑う狐っこに、俺はなんだか胸がほんのり楽しくなっていくのを感じた。
「次行こうぜ！」
「ああ」
テンションが高ぶってきた狐っこに、俺は後ろからゆっくり歩いてついていく。
「これがいい！」
その後、靴も靴下も、たくさん服系統の必需品を買って。
「下着は金やるから、店の人に聞いて自力で四着ぐらいは買ってこい」
「おっけー！」
下着はさすがについていくわけにいかないので、待っている間外で煙草を吸っていた。

そうして街を二人で歩いていると、狐っこが質問を投げてくる。
「なあ、イチノセはどうしてそんあに落ち着いているんだ？」
質問の意図がいまいちわからず、俺は眉間にしわを寄せる。
「どういうこった」
「んーなんかこう大人っぽいというか、なんか年上って感じがするの、なんでだろーって」
不思議じゃないか？　と投げかける狐っこに、まあ歳もあるけど、と俺は話し出す。
「そりゃあお前、いろんな経験してきたからだろ」
「ケイケン？」
「そうだ」
経験の意味を分かってない狐っこに、俺は続けた。
「よくわかんねえ海外行ったり、変なもん食わされたり、親が死んだり。いろんなことがあって、はや五十だ」
「もう五十歳なのか！　見えねーな！」
「まだ四十代ではあるけどな」
サバ読んだな！　と狐っこにからかわれる。なんで経験は知らずにサバを読むは知っ

てるんだ。
「まあヤクで死にそうな人間、たくさん見てきたからな。その辺も関係してるのかもしれん」
「ふぅん」
自分から話しておいたのにとんでもなく興味がなさそうな雰囲気の狐っこと共に店を出て、さあ次はどこに行こうかと考えていた、その時。
「獣人だ！」
シャッター街の人々の悲鳴や雄たけびに、俺と狐っこはすぐさま反応する。
駆け付けた先では、シャッター街のど真ん中で四つん這いになってこちらを見ている、猫のような何かがいた。
「くぅるぅあああぁ、あああ……ぁァァアあ」
「こいつ、理性を失ってる！」
なんの生き物かがいまいちわからないのに、狐っこは冷静な判断で周囲の人を見まわす。
「うわ、わああ、くじょ、駆除を」

「待ってくれ！」
刃物を持って立ち向かおうとする人に、狐っこは静止を呼びかける。
「こいつは、あたし達が正気に戻す！」
あたし「達」？　とぼやいていると、何してんだイチノセ！　とでっかい声が聞こえてくる。
「住民の皆さんは避難してください！」
その声に振り替えると、緑の蛍光色ジャンパーを着たお爺さんたちが誘導を始める。
「自治体のものです。私たちは周囲の人に避難を呼びかけます」
「助かります」
頭を下げると、すでに狐っこは臨戦体制のようで、片足を挙げたのちに高くジャンプして高い位置からのキックをお見舞いする。
「おらァッ！」
だが猫耳の獣人もタフで、口からよだれをたらし眼は白目をむいた状態で奇声を上げる。
「くきゅぅあぁうぅぅうぅうぅぅぅぅぅぅ……」

口から血痰を吐いたものの、まだまだ元気なようだ。その様を見て、狐っこは次に背後から接近する。

「もう一発ッ！」

次は蹴り上げ、シャッター街の道路で暴れる猫耳を数メートル先まで飛ばす。俺は吹き飛んでいったほうに、銃口を向け狙いを定める。

「嬢ちゃん、ごめんな」

――――ドォン。

「わ、ぐぅ、あぁあ！」

暴れている猫耳はだんだんおとなしくなっていき、周りに砂のようなものをまき散らしながら倒れていく。

近寄ると、白く滑らかな肌のショートカットの猫耳少女が、コンクリートの上に倒れていた。

「イチノセ！　お前、あのこは何もッ」

「落ち着け」
彼女を殺したと思っている狐っこは、今すぐ俺につかみかかりそうな勢いで俺を問い詰める。
「麻酔銃だ。こんなこともあろうと、銃弾の種類は五個以上は持っておくようにしている」
「寝、寝てるだけ……？」
狐っこが躊躇なく彼女の頬をぺちぺちたたくと、猫耳の少女はうぅんと言ってもぞもぞ動く。
その様子にほっとしていると、あのうと後ろから声をかけられる。
「ありがとうございます。この御恩は一生……」
「いえ、そんな」
先ほど避難誘導をしてくれたお爺さんだ。腰を曲げてお辞儀をしてくれる姿に、俺も頭を下げた。きょとんとしている狐っこの頭を一緒に上下にぺこぺこ動かしつつ。
「なあみろよ、あの子」
軽く談笑していると、陰口特有の低いトーンが俺の耳に入る。
「本当だ」

「耳がある」
「尻尾も」
「さっきのやつと仲間なんじゃね？」
「怖い……」
狐っこのことをある事ないこと言う声が聞こえ、俺は思わず頭にくる。
「おい……」
こいつはさっき、お前らを守っただろう。
こいつはさっき、お前らの前で、戦ってたろ。
言いたいことをすべて戻してくれたのは、ほかの誰でもない、狐っこ本人だった。
「だいじょーぶ」
狐っこは悲しげな顔で、俺に向かってほほ笑む。
「だいじょーぶだ、いちのせ」
切なげな表情に俺は冷静になって、深呼吸したのちに猫耳の少女を横抱きにする。
「とにかく、この獣人は我々で預かります。では」
頭を下げ、俺たちはコインパーキングへと向かう。猫耳の少女を後部座席に乗せ、狐っ

こはその隣に座って様子を見ることになった。
「普通に寝てるぞ」
「……良かったな」
助手席に積まれた狐っこの荷物が、わしゃわしゃと紙製の音を立てて揺れる。信号が赤になった時、俺は煙草を吸いかけてやめた。
「……お前、本当に平気なのか」
「……何がだッ？」
俺の問いかけに馬鹿のふりをする狐っこが痛々しくて、俺はした唇をかむ。
「……いい」
俺は静かに首を振る。
「あたしたちは「失敗作」なんだ。「変」なんだ。それが変わることはない」
狐っこが口を開いたかと思うと、うつむいた状態で話し始める。
「この子も……あたしも、生きていくしか、ないんだ」
この世界で、と狐っこは呟き、ゆっくり目を閉じる。
「でもよぉ、今日の活躍は迅速なものだったぞ」

「へっ？」
　俺の言葉に、狐っこは顔を上げる。
「なーにが失敗作だよ。俺たちはみんな失敗してる。どこかで欠損なんていくらでもしてる。それをどうするか、が問題なだけだ。今日の対応は、その欠損を塗り替えるほどの仕事だったぞ」
　俺が褒めてやると、狐っこは戸惑ったように目線を右往左往してしまう。
「でも、街の人……」
「目の前の事実が鵜呑みにできなかったんだろう」
　というかお前、気にしてんじゃねぇかと俺は続ける。
「しんみりしたって仕方がねえ。生きていくしか、ないんだろ？」
　俺は片手で沈黙していた煙草を箱に戻し、シケモクに火をつける。
「泣きてえときは泣け。やりたくないときは言え。できないこともできると思わなくていい。やりたくないことを無理にやりたいと思わなくっていい。」
　シケモクが、潰えた。
「うぅ……う、う、うううぅ……」

それと同時に、後ろからすすり泣くような声が聞こえてくる。
曇天の空模様は変化していき、フロントガラスに、ぽつ、ぽつと雨が降りかかる。
ワイパーの音を、俺は黙って聞いていた。

第五話　慣れ

あんなことがあって、はや数か月。

「なーイチノセ！　あたしのパンツどこー！」

こいつがいる生活にも、そろそろ慣れてきた。

「いつもの棚に入ってないのか？」

俺は狐っこの扉を躊躇なく開けると、汚らしくなった部屋が現れる。こいつは掃除が嫌いらしく、中でも服をたたむことが嫌なようだ。そんな部屋に慣れてしまった俺も俺だが。

「入ってないんだよー」

「じゃあ床……」

「みた！」

「じゃあベッド……」

「みた！」

狐っこは誇らしげな顔をして報告してくる。見つかってないんじゃ、そんな表情され

ても元も子もないんだが。
「じゃあお前の足元」
俺はそう指摘しながら、胡坐をかいて座る狐っこの足当たりを指さす。
「んなベタなこと」
あってたまるかい、と言いながら狐っこは立ち上がる。
「あったーーーーーー!!」
どうやらお目当てのものがあったみたいで、尻に敷かれてペチャンコになった下着を見つけて、狐っこは興奮する。
「ほれみろ」
「ありがとうイチノセ！」
「はいはい」
元気な顔でそう言われる。そんなのももう慣れた。
ため息をつきながら部屋を後にし、一緒に夕飯を食べる。その後、ふろ場から悲鳴にも似た声が聞こえてくる。
「うわあああああイチノセ！」

「今度は何だ！」
ぎゃあぎゃあ騒がしい日々が、俺の日常になりつつある。

「おはようございます……」
今日は朝から狐っこが牛乳を床に全部こぼして、散々だった。げっそりしながらビルに入り公安課に向かうと、長官が床掃除をしていた。
「おっはよーございます！」
「おはよう一ノ瀬くん、キツネちゃん」
上司が先に出勤している状況は珍しく、手伝いますと俺は声をかける。
「猫さんはもう回復されました？」
狐っこと二人で窓を雑巾がけしていると、床を磨きながら長官は口を開く。
「うん、だいぶ元気になってきたよ。戸籍もないから、公安内で秘書として活躍してもらう予定だ」

「そうなんですか」
「ちょーかん、今日も人はいないのか？」
　最近は、俺と狐っこと長官以外人がいないことが続いていた。なんだかんださみしがり屋の狐っこは、長官に問いかける。
「うん、なんかトーキョーのほうでいろいろ起こったみたいなんだ。みんなそっちに出払ってるか、人手が足りなくなったフクオカ、センダイ、オオサカに出向いてるよ」
「お陰でこっちが人手が足りねぇけどな……」
　そうぼやくと、まあまあと長官になだめられる。
「そう怒らないで。ナゴヤは今日も出払う必要がないぐらい平和だし、一ノ瀬くんとキツネちゃんの二人でどうにかなるようなことが多いしさ」
「はあ」
　あれから獣人が増えることもなく、俺たちは書類を作成したり、テレビを見たり、よくわからない長官が始めた内職を手伝ったりして仕事を繋いでいた。
「ナゴヤが平和、なんじゃなくてナゴヤの人口が少なくなってきたんじゃあ……」
「まあまあ……」

特に任務もない穏やかな日々に、なんだか複雑な気持ちを抱く。
ナゴヤに人が少なくなってきたのは本当の話だ。徐々に、本当に徐々にだが人口が減ってきている。
「ナゴヤは大丈夫なんでしょうかねぇ」
「だいじょーぶだろ」
長官と俺の話に、雑巾をばちゃっと窓にたたきつけながら狐っこが割って入る。
「こうしてあたしたちが生きてるし、ご飯も食べれてる。今日も明日も明後日も、生きていかなきゃいけないんだ。気にしないほうがいい気がする」
「キツネちゃんいいこと言うね！　そうだよ、今が楽しければそれでいい」
長官の話に、俺は頭を抱える。
「そう言って失敗するやつが、ひとりいた……」

ん？

おれいま、なんて。

『また失敗してしまった！　でも、だいじょーぶだ』

俺に語り掛ける、快活な笑顔で、かつ不細工に笑う八重歯の女。

「うッ……！」

俺の頭に鋭い痛みが走って、俺は床に倒れこむ。

「ど、どうした、イチノセ！」

「う、あ、あたまがッ……う、ぐッ」

苦しい。

痛い。痛い、いたい、いたい。

「おい、どうしたんだ一ノ瀬くん！」

二人が駆け寄ってくる。その足音しか聞こえない。頭が、割れる。

痛い。痛い。　痛い。

痛い

痛い

痛い

痛い

痛い

『体術も鍛えておくことをお勧めするよ』

『どーだ一ノ瀬君』

『ケチ！　いけず！　あほ！』
『いちのせ……』

『バカだろ？　わたし』

『一ノ瀬君は、今日から――――』

「……ん？」
　気が付いたら俺はベッドで寝ていて、白い天井が俺の視界に広がる。
「おれ、寝てて……？」
「……う」

横を見ると狐っこと長官が、半泣きで座って俺の顔を覗き込んできた。

「うわああああああああああああああああイチノセぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ!!」

「一ノ瀬くぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅん!!」

狐っこはまだ許すが長官まで俺の胴体にしがみついてきて、俺はさっき倒れて復活したばかりの体に鞭を打ち二人から逃れようとする。

「うわあああ気持ち悪い離れろ!!」

「いやだーー!!」

「いやだあ！」

「長官はもっと離れろ！　二十年前のソーシャルディスタンス知らねぇのか!!　公民習ったか！」

「習ったよぉ、でも今はよみがえった喜びを……」

「死んでねぇ!!」

すったもんだの奥で、俺は自分の脳の奥底で鈍痛が蠢いているのを感じていた。

第六話　仲間

「新しい任務？」
　狐っこの声に、長官はうんうんと頷く。
「そうだよ。今日は君たちにもう一人、失敗作の少女の保護を願いたいんだ」
「こいつの仲間ってことか」
　顎で示すと、その見方やめろ！　と狐っこに文句を言われてしまう。
「黒ヒョウの女の子、女の子って言っても二十歳は超えているみたいだね。大変そうだけど、頑張って！」
「それ以外の情報は？」
「といいますと？」
　なんだか嫌な予感がする。このあとの言葉を、異常に聞きたくない。
「場所とか、弱点、今現在わかっている情報すべてください」
「場所？　それはねぇ、ナゴヤってことしかわかんないんだよねぇ」
　てへ、と茶目っ気をアピールする長官に、俺は深くため息をついて頭を抱える。

「ナゴヤの広さ舐めてんすか、まじで……」
「どこにいたかとか、場所のちょっとしたヒントもないのかッ？」
「うーん、交番とか警察に聞いてみようか？」
あまり気は進まないけど、と長官は歯切れの悪い言葉を使う。
「気は進まない気持ちはわかりますが、情報はあったほうがいいです」
「うーん……」
長官は腕を組んで渋ってはいたものの、意を決したようにテーブルに置かれた置き電話を取って、ゆっくりゆっくり電話番号を押していく。
「なあ、そんなに仲が悪いのか？　ケーサツとコウアンって」
「仲が悪いっていうか、正直仕事が混在しているところがあるから、向こうが勝手に仕事取ったって根に持ってる、ってとこか。警察は戦いには参加しないが、公安は戦いに率先して駆り出される。対人ならなおさらだ。でもあいつらは、そんなこと理解せず、俺らが仕事を奪ってると思って皮肉をふっかけて来たりするんだよ」
「ふぅん、なんだか大変そうだな」
なんとなく他人事な狐っこに、お前もいずれ警察にムカつく日が来るさと思っている

と、長官の声がか細くなっていく。
「も、もしもし……ああ、いつもお世話になっております。ええと、先ほど保護要請の出された黒ヒョウの獣人について、詳細を知りたく存じまして……」
長官の低姿勢もわからなくはないが、仕事内容はこちらのほうが上なのだ。正直、もっと胸を張ってオラオラいってほしい。
「あああ、はい、そうです！　ん？　え？　わからない？　あっちょっと、でも情報をくれたのはそちら側だと……もしもし？　もしもし？」
長官の焦った声だけが受話器にこだましていたようで、長官はゆっくりとこちらを見たのちに、困ったようにへらっと笑ってしまう。
「わかりませんの一点張りで切れちゃった……」
「見ててわかりますよ……」
でしょうね、と俺は頭をかく。
「ということで、申し訳ないけど、現地で情報調達！」
「まじすか」
やることになったならやるしかないなとあきらめていると、狐っこがなあなあと俺に

話しかけてくる。
「がんばろうぜ、イチノセ！」
胸の前で両手をグーにして気合を入れるポーズをとる狐っこに、俺はふっと笑いがこぼれてしまう。
「……ああ、そうだな」
俺は狐っこの頭をわしゃわしゃと撫でると、何だよと狐っこが笑う。その笑顔がまるで血のつながった娘のように愛らしい。
「なんか二人とも、より仲良くなった気がするぅ」
「うっさいですよ、黒ヒョウ獣人を保護した後のこと考えといてください」
「ふぇ？」
長官の腑抜けた声は無視して、俺たちは長官室を後にした。

車を飛ばして、早数分。
通行人がいる旅足を止め、声をかける。そんなことを繰り返しているが、やはり黒ヒョ

ウの情報は入らない。
「なんも情報掴めねぇな」
「腹減ったー」
空腹の狐っこをなだめつつ、俺は車を走らせる。どんどん人もいなくなっていって、過疎部へと入っていく。
「あああああああ！」
ふいに狐っこが何かを見て叫んだので、俺か急ブレーキをかけ車を止める。
「うるせえ、何だ」
「あそこ！　飯屋じゃないか⁉」
キラキラした目で指をさすのは、トタンで出来ているようななんだかあばら家のような見た目の建物だった。手書きであろう看板には、「ラーメン」という四文字が見える。でもかろうじて入り口にのれんが出ているようで、店としては機能しているようだ。
「まあ、腹が減っては戦は出来ぬというし……行くか」
「やったー、ごはんごはん！」
そういえばこいつとラーメンを食べるのは初めてかもしれない。うどんやパスタなど

の麺類は家で二人で食ったことがあるが、ラーメン屋には俺自身も久しく足を運んでいない。

「パーカーのフード、ちゃんとかぶれよ」

「はあい」

店の扉を開くと、キリキリと金属のような木のようなよくわからない何かがきしむ音がする。

「二名で」

奥から人が出てきたのでそう告げると、ガタイのいい如何にも頑固おやじ、といった感じの男が現れる。頬にできた切り傷の跡に、狐っこはおびえたように俺のズボンにしがみつく。

「な、なんか怖い人だな……」

大丈夫だ、と言うように頭に手を置き、俺は狐っこと並んでカウンターに座る。看板を適当に眺め、狐っこにメニューの希望を聞くと、醤油ラーメンを指さしてくる。

「醤油ラーメン、ふたつ」

指を二の形にし、大将に希望を伝える。すると大将は無言で頷き、厨房で作業をし始

める。火事を起こした後のような黒っぽい影が印象的だ。
軽やかな手つきで、作る工程を進めていく大将。スープをかきまぜ、麺を湯がいて湯切りを始める。
「おまち」
二人分のラーメンには卵と海苔、チャーシューにネギが浮かんでいて、なかなかにビジュアルは良い。醤油の和な香りも、鼻を刺激してくる。
「いただきます……」
割り箸を割って、狐っこは恐る恐る、だが器用に麺をすする。ずぞ、ずぞぞ。ひとつぶふたつぶ、ラーメンのスープが跳ねてテーブルに少しだけ飛び散る。
「……んまい！」
狐っこは満面の笑みで、さっきとは数倍速いペースで麺をすすっていく。あちち、とつぶやきながらチャーシューもはぐはぐ食べるその姿は、無垢な子供のようだった。
触発されるように、俺も少しだけ麺を冷ましつつすすっていく。
「確かにうまいな」
麺は細麺。食べログでしれっと星四とかで載っているような雰囲気を感じる。うまさ

の中に哀愁も兼ねていて、なかなかのクオリティーだった。
フードを気にしながら食事を続ける狐っこに対して、大将は厨房で煙草をくゆらせながら、新聞を読みつつこちらを見つめてくる。
ラーメンに夢中な狐っこをよそに、大将の視線に眉間にしわを寄せていると、大将は新聞を乱雑にカウンターに放り投げ、煙草を一息天井に吹きかけたかと思うと、首でコキコキと肩を鳴らす。
「嬢ちゃん、あんた獣人だろ」
「ぇ」
思いもよらぬ言葉に、俺と狐っこは唖然としてしまう。
「ごっ、ごめんなさい」
「いや、謝らなくていい」
狐っこが謝ると、大将はひらひら手を振る。
「獣人化計画で生まれ、廃棄されたんだろ」
「なんでそれを……」
警戒心を二人で露にし、狐っこはひとにらみ、俺は腰に隠してある拳銃に人差し指を

そえる。
「馬鹿、そんなに警戒しなくていい」
「へ……」
「同じような女を雇ってるからだよ」
大将がそう告げると、来い、と言うかのように厨房の奥のほうに手招きをする。
「こんにちは……」
小さな声でつぶやいた彼女は、ニット帽を外す。
「驚いた、これはこれは……」
「わーッ！　耳、かわいいなッ！」
ニット帽を外し、厨房から出てきた姿は、一見店の下働きに見える格好ではあったが、それでもほんのりと褐色の肌に、すらりと伸びた長いしっぽ。
「黒ヒョウの獣人、メイスと申します」
「メイスさん！　キレーな名前だなッ！」
「はい、大将がつけてくださって」
ゆるく口角を上げるその姿は、しとやかなべっぴんさんだった。おとなしめで、髪を

ゆるく後ろで束ねて。
「ここ」
「そうなんだな……」
「そうだ。あなたの名前も、教えてくれませんか？」
きゅっと手を握って微笑むメイスに対し、狐っこは名前を聞かれて戸惑ったように話を合わせる。
「んだお前、名前も付けてやってねぇのか」
狐っこの反応に、察しの良い大将は新しい煙草を咥えつつ近寄ってくる。
「いいだろ、別に」
「よくねえぞ、名前は相手に命を吹き込む」
命を吹き込むと言われ、俺はハッとする。
「つけてやれ、今すぐだ」
大将のこげ茶の瞳に力強いものを感じて、俺は目をつむる。
名前。
名前、名前。

いつも横切る名前は、あまり思い出せないが。

『私は、翡翠――――』

「りん、か」
「りんか？」
ぼんやりぼやいた単語を、大将は聞き逃さなかった。
「凛に、香で、凛香」
漢字をなんとなく、思い描く。
漢字は、何故か凛の文字を入れたい。
何故かは、わからないけれど。
「いい名前じゃぁねぇか」
俺の顔とは裏腹に、すっきりしたような顔の大将が肩にそっと手を置く。

「ところでお前ら、何しに来たんだ？」
大将の眼光に、俺と狐っこは戸惑う。
「あっ、えっと、黒ヒョウの子を保護……」
「いや、何でもない。ただうまそうなラーメンを食いに来ただけだ」
そう告げると、狐っこがちょっとちょっとと物陰のほうに俺を引っ張る。
「いいのか？　イチノセ」
「ああ。人に危害を加えていないのならいい。俺の独断だ」
「……そーかッ！」
狐っこはわかったぞ、と笑顔で頷く。
「お前さんたち、もう行くのか？」
目的がない以上、長居する必要性もない。大将に、俺はそうだと頷く。
「ああ。もう目的も無くなった」
「……そうか」
さみしそうな声に少し申し訳なくなりつつ店を出ようとすると、
「じゃあ、うちで晩御飯も食べていきませんか？」

「えっ？」
俺と狐っこは、共に素っ頓狂な声を上げる。
「いえ、嫌なら構わないんです。でも、お二人と、もっとお話したいと思って……」
メイスはもじもじしながら、何となく顔を赤らめながら話をしてくれる。穏やかな雰囲気に、なんだかこっちも癒される。
「それに、あなたの名前を聞いてないわ。この方はイチノセさんよね？　あなたの名前、教えてほしいな」
へへ、とうれしそうに笑うメイスに対して、狐っこはやはり困惑の表情を浮かべてしまう。
「それ、は」
「凛香です」
二人の会話に割り込むように、俺は話を続ける。
「凛として咲く花の如く、香ってほしい」
そう、俺の過去の女の人は言っている。
いつものように、不細工な八重歯を出しながら笑って。

「だから、凛香」
俺は狐っこの頭をくしゃくしゃ撫でる。
「な？」
俺が声をかけると、狐っこは言葉を反芻し頷く。
「ん……うん、うん、うん！」
狐っこは、俺からの名前を反芻するように何度も頷いた後、にっこり笑う。
「あたしの名前は、凛香だッ！」
太陽のような笑顔が、空気を和やかにさせた。

第七話　危惧

その後、俺たちはメイスと狐っこのわがままに付き合い、ボードゲームなどをして遊んだ。すごろく、トランプ、ウノ。なんだか懐かしいのばかりで、俺と大将は思い出話に花を咲かせた。

その後母屋に泊って行けというご厚意で、俺たちは大将の車についていく。山道を登ると、そこには日本庭園の美しい大きな屋敷があった。

「先祖代々ここに住んでんだ。あがれ」

「あ、ああ」

「お邪魔します！」

何の躊躇もなく上がれる狐っこを、今だけはうらやましく感じた。

その後メイスが作った食事が並んで、俺と狐っこはお座敷でドギマギしながら食事をした。メイスの作る料理はどれもおいしいし、日本料理っぽいだしの香りなどがしっかりしている。

「これんまい！」

狐っこは肉じゃがをいたく気に入ったようで、家に帰っても作ってほしいとせかしてきた。俺はこんなクオリティのもの作れんが。

風呂に入って、狐っことメイスは一緒の部屋で楽しそうに遊んでいる。その声を聴いてほっとし、俺は布団のある部屋へと戻ろうとした。

すると大将が座敷から出てきて、ついて来いと案内される。

「すまねえな、泊めさせてもらって」

「いやいいんだ。こんな広い場所、二人暮らしには広すぎる」

縁側に着き、座布団を敷いて佇む大将が、俺の向かいに座るように促してくる。俺はただ黙って、座布団に胡坐をかいた。

「こっちこそ、ありがとうな」

「何がだ？」

「メイスのこと、適当に報告しといてくれるんだろ。スーツで来てんだ、公安か警察だろ、あんちゃん」

「まあ、そんなとこだな。どこも人手が足りてないから、まあ嘘も通るだろ」

「ちげぇねぇ」

大将は鼻で笑って、外を見つめる。
そのうちに沈黙が続いて、ふううと深く息をついたと思うと俺のほうにひざを突き合わせてきた。
「危惧しておかねばならないことを伝えておく」
神妙な面持ちでそういうものだから、吸おうとしていた煙草を箱に戻してしまう。箱に戻す行為、もう今年で何度目だ。
「『失敗作』たちが今も世界中に散らばっていることは事実。だが、もう一つ」
「もう一つ？」
「失敗作だけじゃない。サイボーグのようなものも、科学者たちは作っている」
サイボーグ。電子回路を人に組み込んだ、いわば改造人間のようなものだ。そんなものも科学者たちは作っていたのか。全く反吐が出る。
「サイボーグって、どういうことですか」
俺が聞き返すと、大将はおもむろに外を眺める。
「俺は昔、科学者たちを取り締まる課にいたんだ」
「はあ、どうりでガタイが」

「いや、これは趣味で筋トレを……」
筋トレのやりすぎではないか。肩幅がイカっている。こんなにガタイのいい奴は、公安にも警察にもそうそういない。
「とにかく、科学者たちは手ごろに中間程度の凡人を集め、凡人の能力をより持ち上げるという口実の下半改造や拷問に近いことをしている。残酷だろ」
「胸糞悪い話だな」
「正直警察も飲まれつつある。公安も政府に加担しているようなところがあるが、それはトーキョーだけの話だ。ナゴヤは違う。だから、よりいらなくなったものを遠くに捨てる習性があるみたいだな」
「遠くに……」
「トーキョーでも捨てられるものは捨てられるが、その後に野生で見込みを持たれたものはもう一回戻されることもあるらしい。野良犬に改良、ってとこか。不快だよな」
大将は頭をがしがしと掻きまわす。
「ナゴヤから反旗を翻せとは言わねぇ。が、非業な死を遂げる実験者たちを、これ以上増やしたくねぇんだ」

大将のまなざしが、熱い。
「そのために、俺は情報屋をやってるんだ」
「お前、情報屋だったのか」
「ん、言ってなかったか？」
「聞いてねぇな。でも、納得だ」
情報屋、というのは良いつながりを持ったかもしれない。
正直聞き込み調査をしていた時には結構に冷たい対応で疲弊していたが、これからは怪しい動きがあったらこの大将に聞けばいいのか。
「お前、何て名前なんだ」
俺は大将に、名を尋ねる。
「工藤だ。一ノ瀬」
そう言いつつ、工藤は日本酒をふたつ注ぎ、お猪口を一つ渡して、自分は一つ手に取ってこちらに向けてくる。
「ああ。工藤、乾杯」
俺は工藤の名前を呼んで、お猪口をきん、と突き合せた。

第八話　崩壊

夜が明けて、朝食を共にしたのちに、俺たちは車のほうへと向かい、工藤たちは見送りに来た。

「すまん、朝飯までご馳走になって」

「いいや、大丈夫だ。こっちこそ、楽しい時間をありがとうな」

俺が大将にお礼を言っている間、狐っこはメイスの手を取って嬉しそうにお礼を述べている。

「じゃーな、メイス！」

「こちらこそ、ありがとう！」

ゆらゆら揺れながらお礼を言う姿はなんだかほっこりする。

「じゃあ、また」

「ああ。ありがとうな」

「ばーいばーい！」

「ありがとうございます。また遊びましょうね」

思い思いに言葉を発しながら、俺たちは車に乗り込み屋敷を後にする。そしてそのまま車を走らせ、いつもの雑居ビルへ足を運んだ。
「おはようございます」
「おはようございます！」
「おはよう、遅かったね」
時間内だが、いつもよりも少し遅く着いたことに長官は疑問を抱く。
「どこか寄ってたのかい？」
「んーや、友達の家に行ってたんだッ！」
「ともだち？」
友達だという言葉で濁せる狐っこに、俺は少しだけホッとする。保護対象を保護することなく帰ってきたんだ。仕事をせずにただ情報だけを聞いてきたといっても過言ではない。
「黒ヒョウの子かい？」
「そー！」
「うわあああああああああ!!」

俺の雄たけびに、狐っこだけがびっくりする。長官は相変わらず、にこにこしながら狐っこの話を聞いていた。
「なるほど、黒ヒョウの獣人に接触することに成功したんだね」
「そ、それが……」
「え？　んんっと、良い人と一緒に住んでて、すっごい楽しそうだった！」
「なるほど、なるほど」
長官は狐っこの話に耳を傾け、うんうんと頷く。
「つまり、危害を加えるような雰囲気じゃないんだね？」
「はい、そういうことです」
咳をしながら、俺は長官に返す。
「なるほど、じゃあよかった」
にこにこと笑う長官の目に、俺も少しホッとする。
「なんか、よかったです」
「なにが？」
「いえ、なんでも」

何か言いたげな長官をあえて無視して、俺は仕事に戻る。今日の仕事は調査届を出して、町の清掃。のはずだったが、小雨が降ってるので部屋の中を掃除。
そうして仕事終わりに、自販機でココアをのむ狐っこはおもむろに伸びをした。
「あー、なんだか今日は楽しかったな」
「そうだな」
ココアをくぴっと飲み、狐っこは俺に向き合う。
「メイスと、またお話しできるかなッ？」
「できるさ。俺と工藤が電話番号を交換したからな」
工藤という単語に、狐っこは首をひねる。
「くどー？　だれだそれ」
「大将の名前だよ」
「へー！」
楽しそうに今後の話をする狐っこを、俺は車の中に誘導した、はずだった。
突如として、俺の車の前に、黒く大きな外車が横付けされる。なんだ、この不審な車は。
そんな思いは、狐っこに向けて放たれた麻酔銃でかき消された。

「ぅあァ!!」
狐っこは太ももに刺さった麻酔銃の痛みにもがくも、すぐに麻酔が効いたようで、意識をなくしてしまう。
「おい、狐っこ!!　起きろ!」
俺が体をゆすろうとするも、科学者の一人が颯爽と狐っこを横抱きにして連れて行ってしまう。
「おいやめろ、そいつを離せ!」
「元々は私たちが管理していた作品です。所有権はこちら側にある、ということはお忘れですか?」
「は……?　お前らはこいつをスラムに捨てただろ、所有権の放棄に値する!」
「まあまあ、ここで無駄話をしている時間はないので」
そう言いつつ、ぐったりとしている狐っこを車に放り込んで立ち去っていく車。
「ぅ……いちの、せ」
かき消されそうな声で、狐っこが俺の名前を呼ぶ。
「おい待て、おい!」

猛スピードでいなくなった車を、俺は茫然と眺めていた。

「キツネちゃんが、連れていかれたのね」

長官室にUターンして事実を述べると、長官は深く息をつく。

「はい」

「……そうか」

たった一言返事をして、長官はゆっくりと背もたれに寄りかかる。

「よくわからない、白衣の人間が三、四人ほどに現れて……あいつを捕えて、車に乗せてどこかへ走り去りました」

「どこか、ねぇ」

「場所が、わかったりするんですか」

奴らの、と付け足すと、長官は一つだけ、ここ以外ありえないという場所を示す。

「こいつらの仕事場……キツネちゃんが元々住んでいた、「ラボ」だ」

「ラボ、ねぇ」
「キツネちゃんがどの区域のラボにいるかはわからない。だが、ナゴヤ、オオサカにもラボはある。ナゴヤのラボにいる可能性は、十二分にある」
そういえば、車の方角もトーキョーとは逆方面に走っていた。俺はすぐさまナゴヤのラボの位置を調べると、その方角通りの場所が一つ、示される。
「トーキョーのラボとは比にはならないものの、それでも大きな場所だ。迷わないように」
「はい」
「あと」
長官の目が、俺を射抜く。
「所有権はすでにこちらにある。もう我々の仲間だ。」
必ず連れ戻して来い。
滅多にない長官の言葉に、俺は息をのむ。
「はい。必ず」
俺は長官に、まじめな顔をして告げた。

第九話　閃光

ビルを出た時にはもう夜になっていて、空は真っ暗だ。
狐っこがいないだけで、いつもの夜が異常に静かに感じる。なんだかつまらないし、味気ない。
「行くか」
俺は車に乗り、煙草を咥えてアクセル全開で飛ばした。
とかく、急がねば。
「凛香……」
誰に言うでもない名前をぼやきつつ、俺は車を走らせた。

マップが示す場所に、車を走らせる。
場所は山の奥にあるようだ。俺は周囲を見回しながら、奥のほうへと車を進めている。

「んだ、これ」
暗闇でも緑がいっぱいだとわかるほどには新緑が濃かったのに、急に開けた道に出た。向こうのほうも、どんなに遠くに目を凝らしても、平たい世界。砂漠に迷い込んだ、というべきか。
「何もないな……」
きっと土に対して何らかの事件をしているのだろう。その証拠に、車のヘッドライト程度でもわかるぐらいには、緑っぽいような紫っぽいようなまがまがしい雰囲気を感じる。
俺は車を路肩に停め、携帯のライトを頼りにゆっくりと近寄る。建物の全容は見えないが、ドーム三個分くらいのでかさはありそうだ。奥行がわからないから、何とも言えないが。
「ここか」
小さな入り口を見つけ、俺は侵入を試みる。
「行こう」
俺は裏口から侵入し、片手を常に銃に触れるようにしつつ、俺は先を急ぐ。

夜なので、人の気配もあまりない。
そして何よりも嫌なのが、鼻を突く薬品の匂いに、物々しい雰囲気の青い照明。オレンジ色だとか、白色だとかの優しい色合いはどこにもない。
「どこもここも、いやな場所だな」
ラボという場所には今まで何度も入ったことがある。麻薬の取り締まり、殺人現場、密輸事件……どれも陰気で胡散臭いような雰囲気が漂ってはいたが、この研究所に比べたらまだかわいいものだったといえよう。
嗅いでいるだけで正気をなくしそうな異質な薬っぽい香り、打ちっぱなしのコンクリート。まがまがしい雰囲気に、俺は眉間にしわを寄せる。
「……ん？」
ふと横を向いた時、俺は『卵』という壁掛けネームプレートに目が行く。
その部屋に入ってみると、人はだれもおらず、透明な液体が入った無数のカプセルが壁と天井、それと床にびっしりと埋め尽くされていた。
「無駄にガラス張りなんだな……なんでだ……？」
部屋内の家具と言ったら、ステンレス製の棚と机。棚には、カルテか何かがびっしり

と収納されている。
「うさんくせぇ……」
いつもの俺だったら触らないし、見もしない。でも、なんだか開かざるを得なかった。
半目状態になりつつも、俺はカルテを一つ、抜き取った。
「西暦二千十九年……二千二十年……約三十年前か」
今が西暦二千四十七年、ずいぶん昔から謎のデータを漁っていたんだな。名前と住所、よくわからない数量まで、微細に何かが書かれていた。
「二千三十……ん」
ふと俺は、二千三十二年のデータが気になり、じっと見つめる。
「二千三十二年、二月、十三日……」
俺はあるデータに、目が止まる。

二千三十一年　十月　十日
一ノ瀬（旧姓　翡翠）凛　三十二歳四か月　摘出要素　卵子

追記
二千三十二年　二月　十三日
遺体奪取　臓器等凍結保存　状態　極めて良い

「は？」
見知った女、どころの話ではない。
こいつの苗字は一ノ瀬、そして二月十三日。
脳の奥に押し込めたはずの記憶が、ノイズとともに甦り蠢き始める。
「いてぇ、クソ……んだ、これ」
刺すような頭痛に倒れこみつつ、俺は続きを読む。

再追記

二千三十二年　十月九日　一ノ瀬（旧姓　翡翠）凛　摘出卵子、獣人化計画に利用。

狐と人間の少女　生誕　髪の色……ピンク　目の色……青

コードネーム：キツネ

夜行性　　極めて低い

戦闘指数　極めて低い

知能指数　極めて低い

決……退化　廃棄　承認

「……は？」
キツネと人間の少女。
歳が、今生きてて十五歳。
髪の色と目の色、一致。
「あいつ、は」
――――凛と血が、つながって、いて。
そこまで考えた時、俺の記憶は一気に甦る。
「――――ッ!!」
情報量の多さに、俺は意識を手放してしまった。

第十話　真実

「一ノ瀬君は、今日からあたしの下僕だ」
「……は？」
賑やかな署内でカップ焼きそばをすすっていると、今日から直属の上司になったと名乗る女が現れ、俺の横で仁王立ちしてくる。
「フッ、驚いたか？　そうだろうな、私の仕事の出来はパーフェクツ……」
「いや完璧な人間は自分のこと完璧って言わないですよ」
セミロングの女は、八重歯を出して不細工に笑う。
「おっと自己紹介が遅れたな」
「一生一人コントしてる、この人」
俺は正面を向き、目を合わせないようにする。
「私は翡翠凛！　石のヒスイに凛としているって書いて、翡翠凛だ！」
『今日は二千二十二年の二月十三日か。年が明けたのがついこの間に感じてたのに、早いもんだ』

「トーキョーから来たばかりで、今日からお前の直属上司となる！」
『というかこのカップ焼きそばうまいな……マヨネーズ濃いめは今日初めて買ったが、これはリピ確……』
「好きな食べ物は肉で、好き嫌いなく何でも食べる……っておい聞いてるのかッ!?」
「なんすか、聞いてますよ。好き嫌い無いんでしょ？」
「お、おう……ちゃんと聞かれてたんだな……」
　恥ずかしそうな声を無視し食事を再開しようとすると、なあなあなあと言いながら顔を近づかせてくる。
「私が何で話しかけたか、わかるか？」
「わかりまふぇん」
「食いながら喋るなッ！　今日の午後から、共に見回りを行うからだ！」
　どういうことだ。初耳である。
「アッ！　今、意味わからん的なこと思ったろ！」
「はい」
「いや思ったんかい！　いや、長官が是非いろんなところを見て回ってほしいって。つ

いでのパトロールだな！」
誇らしげな顔、なんだか腹が立つな。
「というわけで、お前の隣の席で食事をする」
「……はあ」
「いただきます」
端を遠めに持って卵焼きを少しだけ口に含み、次にご飯も流し込んでいく。無駄にきれいな食べ方に、なんだかギャップを感じた。
この人とバディ、はたしてやっていけるんだろうか。
当時の俺はそんなことを思いながら、麺をすすった。

急な銀行強盗に襲われたのは、その日のことだった。
人口も多く、まだ公安と警察が仲が良かった日、俺と先輩はお金をおろしに行った先で強盗にはちあってしまって。

「おらァ！」
そこで敵を木っ端みじんにして縛り上げ、警察に引き渡したのも翡翠先輩だった。
「ふっふっふ、どーだ一ノ瀬君」
「はぁ……」
「私のように体術も鍛えておくことをお勧めするよ。君、銃の扱いは一人前なんだろう？」
このようにね、と華麗にカンフーの構えを見せてくる翡翠先輩に、俺は適当に相槌を打っていた。だが戦闘において体術のほうが役立つのは本当のことだ。参考にはしよう。
「コンの……クソ女!!」
強盗が逆上し、袖から小型の銃を発砲してくる。
俺たちのもとへ、放たれた弾丸が近づいてくる。
「危ない！」
打たれた銃をかばったのは、紛れもない俺だった。
幸いにも弾丸は外れ、壁へとめり込む。
俺が押し倒す形になってしまい、翡翠先輩は戸惑ったように黒目を右往左往させる。
「あ、いちの」

「何してんですか!!」
「へ」
俺ののどから飛び出してきたのは、怒号だった。
「このッ馬鹿!! 油断しないでください！ そもそも、犯人がきちんと見えなくなるまで緊張は解かないのが鉄則ですよね!?」
「ご、ごめん」
「なんでカンフーしたなんで油断したなんでこっち見てたんですか！ なんで背後に、なんで、なんで……」
翡翠先輩のきょとんとした表情に当てられて、まじめに説教した俺は力が抜けて床に倒れこむ。
「俺の目の前で死ぬのは、違います……」
頼むから、と絞り出すと、翡翠先輩は立ち上がってそっぽを向いてしまう。
「……ごめん」
翡翠先輩もまた、俺と同じように言葉を絞り出した。

あれから何となく気まずい空気が流れていたが、俺と翡翠先輩はなんとなしに和解し、話ができるぐらいにはなっていた。
「なあ一ノ瀬君、この始末書代わりに書いてくれないか」
数年後、こんな関係になってるぐらいには。
「お断りします」
話ができるぐらいというのはやっぱり嘘だ。パシリにされつつある。
「えーッケチ！　いけず！　あほ！」
「じゃあ始末書を後輩にやらせようとする先輩はどうなるんですか？」
「あう」
こうやって返すと、論破されて縮こまりつつ、わかったようと言いながら仕事に戻る。
そんなやり取りが、割と続いた、
「やあやあ、ごくろうさま」
「長官、お疲れ様です」

俺たちが話していると、長官が颯爽と現れる。
「翡翠さん、単独で行ってほしい業務があるんだが」
「はっはい」
「警察のバックアップという状況にはなるんだが、また詳しいことは長官室で話そう。私もその任務に同行するんだ、行こう」
「は、い」
なんだか強引ともとれる長官の雰囲気にたじろぎつつ、翡翠先輩は連れていかれる。
これが、悲劇の始まりとも知らないで。

その後ほどなくして、翡翠先輩はチームのバックアップに連れていかれた。
「まあ私は有能だからなッ！」
「……はあ」
バックアップに赴く前日、一緒に帰っている時。先輩は今日も、笑顔だ。

「だからこっからすごいスピードで昇進して、お前を連れて行くぞ。お前はすごい腕がいいからな！　めんどくさがりだけど！」
「一言余計って言葉、知ってます？」
ため息をつきながら、その後もたわいもない話をして帰る。今日はかわいい犬がいたとか、ソシャゲで爆死したとか、甘いものが食べたいとか。
そのうちに自宅への道にさしかかって、俺は坂のほうを指さす。
「じゃあ俺、自分のアパートこっちなんで帰ります」
お疲れ様です。そう言いかけたのに、彼女にコートの袖を引っ張られ、俺は歩みを止めてしまう。
「なんすか。帰り……」
「私、怖いんだ」
震える目が、俺を見つめる。
「なんだか、いやなよかんがする」
「……なんで」
「わからない」

翡翠先輩はうつむいて、か細い声で話し出す。
「私はいつも怖いんだ。怖がりで、泣き虫だから。だからこんな話し方にしたし、体術も強くしたんだ」
うつむいていた顔が、ふっとあげられる。
「私、私は、本当は、弱いの」
目尻から零れそうな雫が、揺れる。
「人はみんな弱いですよ」
俺は翡翠先輩の頭にそっと手を添え、話し続ける。
「それを埋めるために、努力をするんだ。でもそれが報われることがほとんど、ではない。勿論努力をしない奴はもっと報われない」
でも。
「俺の前でくらい、別に気抜いていいんすよ」
別にあなたが決めること、になっちゃいますけど。
「……うん」
俺がそう付け足すと、翡翠先輩は自身の頭に手を添え、俺の手を両手でそっと握る。

「ありがと。一ノ瀬君」
先輩の顔にあった涙はひっこんで、笑顔が生まれていた。
「じゃあね。がんばる」
「はい。また、課で」
「ふふ」
小さく笑って、歩き出す彼女。
俺はそんな背中を、ただただ見つめていた。

調査記録

薬物投下実験　西暦二〇二五　一　一〇　始動

志望者数名の死亡を確認。

死亡者名

・國屋啓二　・持野うらら　・嬉野良子　・林宗次　・設樂淳

投与成功者

・柊葵　・澤田浩二　・立井祐樹　・松尾奈々　・森本裕

投与成功者（逃亡）

・翡翠凛

逃亡者

約三十八名（割愛）

その他数多くの逃亡者は放置、投与成功者は今後も要観察。

追記

〈特例者〉翡翠凛は　放置

豪雨の中で一人歩く彼女を見つけたのは、それから数時間後のことだった。
数メートル前も見えないような場所を、ぐしょ濡れで歩く彼女。
「何してんすか」
俺は車を停め、背後から近寄って声をかける。
「いちのせ……」
振り返ったまなざしは、おぼろげだった。
「なんですかその傷、なにがあったんですか」
「あ？　あー……」
消え入るような声。言語が、話せないのか。
「他の、みんなは」
俺がそう尋ねると、彼女は口をすこしはくはくさせ、それから下唇を異様な力で噛む。
「長官は、死んだよ」
「は」
俺があっけにとられているのも無視し、彼女は俯いて淡々と呟く。
「けがは、あたしが一番軽いほう。ほかのやつらも、蜘蛛の子散らすように逃げた。わ

ああって」
今どこにいるか知らね、と彼女はぼやく。
「はめられたんだ。警察に。ヤクザの喧嘩止めに行くと思ったら、科学者たちの根城に連れてかれた」
雨が降っている中、彼女は笑う。
「バカだろ？　わたし」
雨が少し弱まって、彼女のけがの具合が目に見えてわかるようになっていく。
右の二の腕からの出血。腫れて半分しか開いていない左目。
「公安として薬物止めに行ったのに。トラップに引っかかって、渦中のヤクを注入されちまったんだ。ここ。ひだりうで」
「……」
左腕を見つめて、ばかだなぁ、ともう一度反芻するように、彼女は呟く。
「はは、体がしびれて、うごか、ね」
その場に、彼女はべちゃりと倒れこむはず、だった。
「んだよ」

ひざをついて、彼女を抱きしめるように支えたのは、まぎれもない俺自身だった。
「はなしてくれ」
「放しません」
頭を強く抱きしめる。肩にかかる息が、か細い。右の二の腕から零れている血液が、俺の体に流れてくる。
ああ、生暖かくって仕方がない。
「あんたは、ずっと俺の隣にいるだけでいいんだ」
俺は、彼女の頭をなでる。
「うん」
彼女は、左腕だけで俺の体を抱きしめ返す。
そうして、お互い暖を取って。
補いあって、生きていくんだと。
彼女の唇に自身のものを返しながら、そう誓った。

左腕が動かしにくくなった彼女が俺のアパートに転がり込んで、一週間。
「どうせなら、結婚しないか？」
「は？」
戸籍を移すときに漏らした言葉が、俺の心にのしかかった。
そうしてなぜかその勢いで、一軒家を購入し移り住むことも決意。
「まさか一軒家まで購入とは……」
「お互いに貯金派で良かったよな。楽だ」
そうして家に住み始めて、二週間がたった。
「まあ、そうっすね」
緩やかに減っていく人口の中で、一軒家を購入したほうが得だったということを後から考えていた。
「おい、敬語癖やめろよ！」
「ん、善処、します」
俺の敬語癖は、いつ抜けるんだろうか。
照れ笑いのように笑っていると、彼女の腕に俺は目が行く。

「そういえば、うでは……」
「ああ、洗濯終わったみたいだ。行ってくる」
「あ、ああ」
　ちょうど乾燥が終わったようで、彼女はぱたぱたと脱衣所のほうへと向かっていく。
なんだか違和感があったが、それは日々の中でかき消されていった。

「じゃん！」
　あるとき家に帰ると、エコー写真と母子手帳を机の上に置かれ、誇らしげな表情をされる。
「……は？」
「お前、パパになるんだぞ」
　その事実に、俺は言葉が出なかった。
「……そうか」

「あーッ！　泣いてんだろ、顔見せろー！」
「嫌」
俺は自分の表情を見せないため、顔をのぞきこんできた凛を抱きしめる。
「……ふへ」
凛はきっと、いつものように八重歯を出して笑ってるんだろう。彼女のにおい、ぬくもり、やさしさを感じながら、俺は凛の頭を撫でる。
「ありがとう」
「おう。ヒロも。ありがと」
「……ああ」
好きだ。
どうしようもなく、太陽のように明るくて、まぶしいこの女が。
どうしようもなく、好きだった。
「……」

妊娠七か月目の時だった。
あいつが、事故で亡くなったのは。
頭部はつぶれ、左腕は変な方にねじ曲がって。
霊安室で対面した時の記憶なんて、俺にはなかった。

なかったのだ。
そうだ。

「死ぬな、凛」

「死ぬなよ」

「凛、凛、死ぬな、死ぬな、死ぬな、死ぬな、死ぬな、死ぬな死ぬ

な死ぬな死ぬな死ぬな死ぬな死ぬな死ぬな」

念仏のように、葬式の時も、毎日、毎日、毎日、毎日、言い続けて。
そうして、俺は。

「翡翠凛って、だれだ」

解離性記憶障害となって、凛の記憶を忘れた。

第十一話　コードネーム

「ッ!!」

すべて、思い出してしまった。

思い返してしまった、というべきか。

奥底に沈めていたはずの凛の記憶があふれかえって、俺は思わずその場で戻してしまう。

「グ、グぇ、げ、おぇ」

呼吸を整えつつ、俺は自分自身の意識を覚醒させるため頭をぶんぶん左右に振る。

「落ち着け、俺」

凛のことも、知りたい。

だが今は、

今は。

「狐っこを、凛を、助けるんだろ」

起きろ、俺の体。

柄にもなくこんなことして、でも、それでも。
「行かなきゃ、ならねぇ」
俺は、歩みを進めた。
頭痛は、もうなかった。

「そいつを返してもらおうか」
俺の声が、広く空虚な実験室と思われる場所に響き渡る。
「お前は、一ノ瀬……！」
「そこで寝てる狐っこも、返してくれるか」
ベッドで寝かされていて、四肢をそれぞれ四つの枷でつながれている狐っこを指さすと、科学者たちは歯を食いしばる。
「お前らはずぅっと昔に、こいつの所有権を放棄したはずだ。なのになんでもう一度捕まえてやがる？　なんでまた閉じ込めてんだ、こいつを」

なめまわすように銃口を科学者の数人に順番に向けていくと、科学者のひとりが言葉を発する。
「知能、指数が」
「ほぉ」
俺の反応に逆なでされたように、プッツンした科学者は呂律を速めて勢いよくまくし立ててくる。
「知能指数が、お前といることによって上昇してきたからだよ！　お前のおかげかもしれねぇ、だがこれは研究せねばならん！　残念だがっこいつの体内のデータはすべてこちら側に筒抜けになるよう、獣人はみなそうやって作られている！　だから貴様との行動はすべて筒抜けなんだァ!!」
「何発狂してんだ。そうカッカすんなよ、暑苦しい」
ため息をつきながら、俺は顎で狐っこのほうを示す。
「早くそいつを、放せ」
放せと言っても動かない科学者たちにしびれを切らし、俺は狐っこのほうへと銃を向ける。

「こいつ、研究対象を……！」
放たれた銃弾は思わずかばう科学者を射抜き、狐っこの枷に当たる。妙に脆い材質だったのか、枷は音を立てて外れて崩れた。
「こいつ、銃で枷を……」
残り三発も同様の形で打って外し、狐っこはなにも繋がれていない状態になる。
「おい、起きろ」
「こいつ、かくなる上は……」
科学者がボタンを押すと、急に警告音が部屋中に鳴り響く。
「うぁ、んだこれ」
そして俺がいた床だけが下に落ちていく。底が沈んでいる、というべきか。
「……は？」
気が付けば俺は、プロレスリングの中に立っていた。
『おーーーーーッと、挑戦者です！　今日の良き日に、全く誰ともわからない挑戦者が現れたーーーーーーーッ!!』
実況のやかましい声とともに、いろんな人間の歓声が聞こえる。一人きりのリングで

見回すと、全員が全員白衣を着た科学者たちだということがわかる。
「この実況もプログラミングされてんだろうな」
『そしてそして、挑戦者と戦ってもらうのはーーーーーーーッ!!』
やかましい声にため息をついていると、奥のほうからレッドカーペットが敷かれて、ゆらゆらと一人の男が歩いてくる。
「久しぶりだな、ちゃんと挨拶しろよ」
セコンドのような科学者に背中を押された不気味な男は、よく見知った顔で。
「おい、お前」
やたらめったらに奇妙なその男は、俺に向かって人間味のない鳴き声を上げたのちに、よだれを三滴床に垂らす。
「コードネーム：コゾノ」
聞きなれたあいつの名前を、こんなところで聞きたくはなかった。

第十二話　喧嘩しようぜ

「……小園」

俺が名前を呼ぶも、小園はびくとも動かない。

それどころか、名前を呼ばれて喜んだように笑みを浮かべているほどだ。

「いけーーー!!」

「やれ！　コゾノ！」

小園はここでは人気者らしい。科学者たちの声がそろいもそろって、小園コールが生まれるぐらいだ。

『コゾノ、今日も人気者です！　百戦錬磨の戦いを乗り越えてきたこの体で、本日も生身の人間と戦うのだーーーー！』

プログラムが叫ぶと、科学者たちも一緒に雄たけびを上げる。

「めんどくせぇな……」

「おいコゾノ、ここで勝てば五十連勝だぞ」

科学者の耳打ちが、俺の耳に聞こえてくる。

「おい、小園」
俺が声をかけると、セコンド科学者はさっと離れていく。
「喧嘩、しようぜ」
俺はスーツのジャケットを脱ぎ捨てて、笑みを浮かべる。
すると、それが開始のゴングとなったのか、小園はまっすぐこっちに向かって走ってくる。
「はあ……」
犬のように突進してくる小園の顔面を、とりあえず一発殴ってみる。
『ごふぁッ！』
普通に痛覚があるみたいで、血しぶきが飛ぶ。
俺はなんだか加虐心がうずいてしまって、笑いながらもう一発頬を殴る。
「久しぶりだなァ、おまえとこうして、殴り合う、のはッ！」
『ぐるぅうう、う、あぅ』
苦し気な小園の声に、俺はその昔、こいつと手合わせした時のことを思い出す。

「うわぁ！」
腹を蹴り上げると、小園は遠くのほうへと吹っ飛ぶ。
「はい、俺の勝ち」
ビル内にある稽古場の道場にて、俺は小園に対して鼻で笑ってやる。
「くっそ……お前、銃も出来れば体術もできたのかよ」
「どっかの誰かに体術やれって言われてからな。鍛えた」
どっかの誰か、の言葉に俺の頭の中の凛が呼んだ？　と反応してくる。
「お前はいつも、俺の先を行くよな」
「悪いか？」
「いや、全然！」
皮肉かと思ったらそうではなかった。小園はへらっと笑いながら、立ち上がって構える。
「むしろ楽しくて仕方がない」
「へへッ……俺もだ」

俺たちの手合わせは、その後深夜まで続いた。

「あの日も、そのまた次の日も、お前は倒しても倒しても立って、俺の横に立ってきて……」

『くぅる、う、あぁ』

殴るたびに、機械音と人間の嫌がる音がこだまし、俺は多少の気持ち悪さを覚える。

「お前は、お前だけは、俺と対等だと、思ってたのによ」

『ぎゅう、うぁあ』

「なんなんだよ、その姿はよぉ!!」

俺があの時のように蹴り上げると、小園はリングの向こう側へと吹っ飛んでいく。

『おーーーっとコゾノ！　リング外に吹き飛ばされたーーーーッ!!』

やかましい観衆の声と解説をバックに、俺は吹き飛ばされた小園のほうへと向かって吐き捨てる。

「さっさと戻って来い。馬鹿野郎」

『くぅぅ……あぁあああああああああッ!!』

俺のキックを受けてもなお、リングに直って立ち上がってくるところは、サイボーグによる強さなのか、はたまたこいつの精神力なのか。

「お前さ……そのタフさは、機械になっても変わらないんだろうけど」

あきれたように小園を見つめつつ、いつもの稽古の雰囲気を思い出す。

「お前の弱点を、俺が知らないわけないだろ」

矯正が失敗したと笑っていたあの顎を、アッパーカットで一発KO。

前歯をひとつ吹っ飛ばし、小園はその場に膝から崩れ落ちる。

『こ、れは、システムにないじょうきょ、ウ――――』

プログラムの終了音がこだまし、群衆の悲鳴ともとれる声が頭に入らないほどに、俺は元に戻った小園が倒れた姿を見つめていた。

第十三話　野性

リングを後にし、俺は観衆の中に紛れて歩きを進める。
「う、うわあああああああッ、逃げろおおおお!!」
俺が進む先の科学者たちが、蜘蛛の子を散らすように逃げていく。俺はその中の逃げ遅れた科学者の一人の胸ぐらをつかむ。
「ここのボスはどこだ」
涙も鼻水も汗も、すべてにおける体液をだらだらと流しながら、科学者はもごもごと話し始める。
「ひゃ、ひゃい、ここの一番、奥に……!」
「そうか」
居場所だけ聞いて、俺は科学者を床に投げ捨てる。いつも研究ばかりしていてひ弱なのか、床に勢いよくたたきつけてやっただけなのに泡を吹いてしまう。
ふん、と鼻で笑って、俺は闘技場もどきを後にした。
早足で廊下を進み、迷った先で科学者に尋ねて、殴り飛ばして。

俺がボスの部屋に到達したころには、下半身と両腕は、ほぼほぼ返り血に染まっていた。
「お前か、ボスは」
壁じゅうモニターまみれの薄気味悪い部屋にいた、ひげを蓄えた研究者は振り返る。
背は俺より低く、爺さん、という表現ですべての人が納得しそうな容姿だ。
「侵入者か……」
「教えろ」
俺は片手で素早く銃を構える。頭は、冷静だった。
「どうして、凛はお前らに掌握されていた」
狐っこなどの失敗作のこともそうだが、俺はこいつらの問いに私情を挟んでしまう。
「どうして、お前らと関わっていた」
いつもの俺ならそんなことしないだろう。仕事のこと、だけだろう。だが、カルテに俺の嫁の名前があった以上、聞かないわけにはいかない。
「それは、あいつ自身が望んだからだ」
視線は俺に向かれたまま、白衣の中に手を突っ込んでリモコンを操作する。

「これは……」

映し出された映像はモノクロで、音の質も悪い。でも、尋問質のような部屋に凛と科学者が二人、一人は座って、もう一人は壁に寄りかかっているのが確認できる。

『お前の薬を取り除いてやる、その代わりにお前の体内データを寄越せ』

薬とはきっと、あの暴動の中で凛の体内に入ってしまった薬物のことだろう。

『なッ……』

凛が狼狽えているのが、画質の荒いモニターから伝わってくる。

『そんなこと、できっかよ！　また悪用するんだろ！』

『俺たちをそこらの悪徳科学者たちと一緒にすんなよ、翡翠』

『だから、あたしはもう一ノ瀬……！』

俺の名字を口にしたとたんに、壁に寄りかかって黙って聞いていた科学者が凛にゆらゆらと近寄っていく。

『おやおやおやおや、その『愛しの一ノ瀬』に危害が及んでもいいんですかぁ？』

『……は？』

『俺たちは元からこいつを監視してたんだ。異様な銃の腕、やれば何でもできるそのカ

リスマ性、でも昇進は嫌い……そんな人間、この人不足の世の中で必要人材だと思わないか？』

突如として俺の話が出てきて、俺は頭が真っ白になる。

『お前はこいつと比べて頭が足りないが、人間味あふれる行動や、リーダーシップ、それに体術なら他の追随を許さない』

『……』

凛の沈黙が、痛い。

『さぁァ『一ノ瀬さん』、俺たちと、取引しないか……？』

科学者のゲスな声が響き、映像は終了した。

「これがすべてだ」

リモコンを投げ飛ばしたひげ科学者は、俺のもとに近づいてくる。

「翡翠凛は自らいけにえとなった。そして生涯お前を守ると誓った。本当はお前を連れてきたかったが、翡翠はそれを自らの手で拒み、そしてすべてを自分自身が受け入れた」

「下種な野郎だな、お前らは」

俺は銃口をひげに向けるが、そんなのお構いなしといわんばかりに奴はゆっくり、ゆっ

くりと、こっちに近づいてくる。
「いいか一ノ瀬。お前が、翡翠凛を殺したも同然なんだ。お前がいなければ、彼女は死ななかった」
ひげは俺に向かって嫌味を放つが、俺には通用しなかった。
「それは違うんじゃねぇか」
一発。
放った弾丸は、ひげの手のひらを貫通した。
「凛を殺したのは、お前らだ」
この事実は、揺らがない。
「そして、あいつはあくまでも「交通事故」で死んだ」
銃を持つ手が、震える。
「これ以上、あいつの死を塗り替えるな」
腹が立つ、と一言漏らして、俺は銃口を下げる。
「ふ、ふふ……」
打たれた手を抑えながら、ひげは不敵に笑う。

「何が可笑しい」
「はァ……いや……」
血濡れた手で頭を抱え、ひげの額に血液がつく。その姿は、マッドサイエンティストといえるような気味の悪いものだった。
「いやな……遺伝子とは不思議なもんだ、と」
「は……？」
「私たちは何もプログラムしたわけじゃない。勿論お前の情報なんて与えていない、なのにお前とキツネが「偶然」出会って、「必然的に」チームを組んで一緒にいるのが不思議でナァ……？」
「遺伝子だの運命だのという、空想まがいの話か。そんなん知らねぇよ」
「私は、研究することを間違ったのかもしれん。一ノ瀬……やはりお前を、調べるべきだった」
翡翠凛との、異様な運命の糸を。
そうひげが告げた途端に、地響きが鳴り始め地面が揺れる。
「なんだ、この地響きは」

俺がバランスをとっていると、建物がぎし、ぎしと音を立て瓦礫たちが落ちてくる。
「お前、何をした」
「はッ……どうせ死ぬ命なんだ、この建物と一緒に、私たちは死ぬ」
諦めたような、何かを悟ったような目。
まさか。
「もともと悪事が世に知れ渡り、世界規模で動かなきゃいけない空気を察知したらこの建物は壊すつもりでいた」
「お前……」
「見ろ」
ひげが差し出した手の中には、小さなリモコン。
「私はいつもこれを持っていた。そして今、始動する時が来た……」
「……チッ」
舌打ちをし、俺は銃口を躊躇なくひげに向ける。
「言い残したことは」
「……お前を、研究したかった」

「そうか」
淡々と処刑を終え、俺は部屋を後にする。
ひげの言っていたことを、今は忘れて。
「狐っこ!!　どこだ!」
俺は、崩壊の一途をたどる建物内で叫ぶ。
反響して聞こえてくるのは、科学者たちの声と、逃げるままの実験対象たち。
「おい、きつ……」
来た道を戻っていく中で、数多くの生き物たちが全員違うほうへと逃げていくのにすれ違う。
きっとこの道を進んだら、俺自身も死ぬ。
「……りん、か」
でも、あいつだけは、
「凛香」
あいつ、だけは。
「凛香、凛香、凛香!!」

どこにいる。
どこに、いるんだ。
「返事をしろ!!　凛香!!」
返事を。返事を、返事を、返事を。
血眼で探して、最初凛香が眠っていた部屋へと戻ってくる。
「り、ん」
人っ子一人いなくなって、瓦礫がどんどん増えていく。
地震も地響きも、加速していく。
俺はここで、死ぬのか。
目を閉じた、その時。

「おそいぞ」

聞きなれた声が、俺の横で聞こえた。
「り、ん……！」
その刹那、壁が崩れ落ちてくる。
俺はとっさに受け身の体制をとったが、それをかばったのは紛れもない、凛香だった。
「ふ、ん、んぅうううう……!!」
いや、凛香……なのか。
「凛、香？」
本当に、凛香なのか。
「ああ」
二メートルくらいはありそうな、四つ足の大きな、薄桃色の毛皮の、大きな狐。
「あたしには、お母さんが二人いるんだな」
狐の姿の声帯から、凛香の声が聞こえてくる。
「狐の母さんと、人間の母さん」
狐になっても長いまつげが、揺れる。
「今は、狐の母さんの力を借りる」

そう言い放ち、凛香は俺のスーツの襟後ろを咥え、俺を背中に乗せる。
「行くぞ、イチノセ!!」
ふわりとしたぬくもりと、ちょっとだけきしんでいるような毛の感じは、なんだか懐かしくて、気持ちがいい。
「ああ」
俺は笑って、凛香の頭をなでる。すると凛香も少しだけ笑って、少し助走をつけたのちに軽やかに走り出す。
「つかまってろよ!」
落ちてくる瓦礫をしっかり聞いて、避けていく反射神経。どんどんと先に進んでいってしまう、そのスピード。
「す、げぇ……」
車と同じくらいの速度で、いやそれ以上の速さを感じて、俺は唖然としてしまう。
「すっごいだろ？　出口まで、もう少し……!!」
誇らしげに、軽やかに、迅速に。
異様に速いスピードが、俺たちを外へと導いてくれる。

「よし、出口だッ！」
凛香の一声と共に光が見え、俺たちは澄んだ青空に出る。もう朝になっていたのか。
太陽の日の出がまぶしい。
「お？」
その刹那。今までで一番豪快な崩落音が、轟く。
「ま、まじか……」
俺たちが外に出て、安心したのもつかの間。
その途端に、建物は音を立てて崩れ落ちていく。
「イチノセ！　あたしの毛皮に頭突っ込め！」
「いわれなくて、も……!!」
砂と瓦礫、その他埃たちが舞い上がる。
ごうごうと吹きすさぶ粉塵は、一分ほどたって収まった。
「収まったか？」
「みたいだな」
俺が足元に気をつけながら降りると、凛香が白い光に包まれ、いつもの人の姿へと戻

る。
「お前、そんな力があったんだな」
「すごいだろッ！　なんか、一回こうなったことがあって……その感覚を、この土壇場で思い出したんだ」
「なるほど、優秀な奴だ」
凛香を褒めるが、彼女の顔は瓦礫のほうを向いている。俺も同じ方向を向き、災害がそこだけで起きたような山々をただ見尽くした。
「この瓦礫の中に、どれだけ人がいるんだ……」
凛香が呟いた一言は重く、俺は吸おうとしていた煙草をしまう。
「さぁ、な」
振り向いた先には、半裸の男がいた。
「うげっ」
いや、それも見知った顔で、さっき喧嘩したばっかりの。
「小園お前、なんで生きてる」
「お前こそなんで生きてんだ!!」

「いや俺はこいつのおかげで」
俺が凛香に目をやると、かわいい女が好きな小園はすぐさま近寄って猫なで声で話しかけ始める。
「うっわすっげーかわいい！　初めまして、このいかつくておじちゃんに怖いことされてない？」
「お前……」
調子のいい小園に対し、凛香は眉間にしわを寄せる。
「されてないぞ、なんだこいつ」
「わぁおおじちゃんにそっくりだね、君！」
そっくり、という言葉に反応した凛香は、こっちを向いたのちに、にたぁと笑みをこぼしていく。
「勿論だぞ、だって……」
凛香がおもむろにこちらを向く。俺も、なんだか同じことを言いたくなった。
「「親子だからな！」」
俺と凛香は、顔を見合わせて笑った。

獣人にしては軽い体重を、受け止めながら。

エピローグ

あの騒動から数週間。

俺は凛の墓場を掃除しに行った。管理する者のいなくなって荒れ果てたその部分だけを、雑草をとって、水をやって、丁寧に、丁寧に。

線香と白い菊を添え、俺は何を声かけるというわけでもなく、その場を後にする。

そうして、今日も今日とて出勤。

「おっはよー凛香ちゃん！　なんで来たんだ一ノ瀬」

「悪いな」

小園はナゴヤに出戻ってきた。今までいろんな場所にいた仲間たちも帰ってきて、ビル内は今まで以上に活気にあふれている。

「おはようございます！　ミミさん」

「おはよう、凛香ちゃん」

猫耳の少女はミミと名付けられ、事務の仕事をすることになった。今では長官に鬼の形相で溜まりに溜まった書類片付けの請求をするぐらいには、課を掌握している。

「さー、今日も始末書、始末書」
俺たちはあの場にいたものとして始末書の山々を片付ける日々だった。いかんせん人が少ないので、送られてくる書類の枚数も一気に来るわけじゃない。
「うげー、もう文字見たくねえよー」
「俺もだ」
二人でため息をつきながら、ハンコを押したりサインを書いたり名前を記入したり。ペンだこができそうな勢いだ。
「なあ、これからどうするんだ？」
この始末書が終わったらさぁと言いながら、凛香は俺に話しかけてくる。
「さぁな」
俺はハンコを押しながら、凛香に返事をする。
「でも、他にも沢山、アタシみたいな子がいるんだろッ？」
「ああ、そうだな」
お互いに紙にものを書きながら、目を合わせることはない。
だがそう思っていたのもつかの間、凛香は俺の目を見て笑う。

「じゃあ、助けに行くしかないよな！」
獣人特有の、八重歯をみせて。
「ああ。そうだな」
光った八重歯は、やはり凛に似ていた。

作品告知欄

本と、貴方の心を借ります。
「著」優詩織　「画」さくら怜音
（定価 330 円（10％税込））

仕事を接点に、二人の男は恋に落ちる。
だが、物事はそう簡単に動くのか……

教師×図書館司書の現代 BL ！

作品告知欄

子羊は今夜、肉食龍に食される
「著」優詩織　「画」陽名ユキ
（定価 495 円（10％税込））

一目惚れしたので、拉致しました。

天然少女と肉食イケメンのとろけるような恋愛劇！

失敗作のユースティティア
「著」優　詩織　　「画」鈴木　蓮

2022 年 2 月 8 日　発行
発行　名古屋デザイン & テクノロジー専門学校
印刷　　オンデマンド
連絡先　　youshy1001@gmail.com

無断転載・転記禁止